

『多摩川史のまとめ』

基調講演：知花 武佳氏
コーディネーター：神谷 博氏
パネリスト：小田 静夫氏
江口 桂氏
橋場 万里子氏
望月 一樹氏
眞下 祥幸氏
小野 一之氏

－ 開催報告 －



第3回多摩川流域歴史シンポジウム 「多摩川史のまとめ」開催報告

2021年9月26日(日) 13:30~16:50

場所：日野市東部会館内ホール

参加者：57名(WEB) 主催：多摩川流域懇談会

開会

○佐山公一（多摩川流域
懇談会・司会）

皆様、定刻となりましたので、第3回多摩川流域歴史シンポジウムを始めたいと思います。



最初に、多摩川流域懇談会事務局でみずとみどり研究会の佐山が本日の司会を務めさせていただきます。本日はよろしくお願いたします。

開会挨拶

神谷 博氏（多摩川流域懇
談会運営委員長）



○神谷

皆様、こんにちは。神谷でございます。

それでは、趣旨説明、内容について御説明したいと思います。まずタイトルについて、第3回多摩川流域歴史シンポジウムはサブタイトルとして「多摩川と人間のかかわりの歴史を掘り起こし、『多摩川らしさ』としての地域文化を再発見していきます」となっています。これが全体の趣旨となっており、今日はこれまで続けてきました歴史セミナーの総まとめとしてのシンポジウムとなります。

開催趣旨として、「これまで多摩川流域歴史セミナーを『古代』『中世』『近世』に区切り、10回開催してきました。今回はその総まとめとして、第3回多摩川流域歴史シンポジウムを開催いたします。」とあります。これは時代区分として大きく分けて考え、時間軸でつないでいくということですが、もう一つは、各時代における多摩川の上・中・下流域地域をつなぐということも含めて扱ってきました。

さらに会場に関して、学芸員さんのお話を中心に各地域、流域の博物館を巡ってきました。「多摩川流域の郷土博物館、人をつなぐ」ということで、時間をつなぐ、地域をつなぐ、人をつなぐ、という趣

旨で続けてきたセミナーです。第1回を2014年の11月に開催し、第10回が2020年の11月と6年間行ってきました。その間に、歴史シンポジウムを2回行っています。今回が3回目となります。「多摩川歴史巡り」という地図のお披露目も兼ねた総まとめとして、今回のシンポジウムを開催しました。

本日のタイムスケジュールについて、初めに基調講演をいただきます。これは多摩川流域懇談会の会長をされております知花先生からお話をいただきます。「河川工学から見た多摩川の歴史」ということで知花武佳先生、東京大学大学院工学系研究科准教授です。休憩を挟みましてパネルディスカッションに移ります。パネルディスカッションのテーマは「歴史セミナーを振り返って」ということで、私がコーディネーターとなり、コメンテーターには知花先生に入ってくださいます。また、全10回のセミナーの中で、今日は6名の発表者の方にパネリストとして来ていただいています。小田静夫先生は東京大学総合研究博物館研究事業協力者で、第1回にお話しいただきました。「多摩川歴史巡り」の作成は小田先生の御提案で始まりました。それから江口桂さんは府中市文化スポーツ部ふるさと文化財課長、第2回にお話しいただきました。次に橋場万里子さんは多摩市文化振興財団学芸員で、第5回に、関戸合戦、関戸の地域性ということでお話しいただきました。望月一樹さんは神奈川県立歴史博物館長で、第7回に多摩川下流域の中世史についてお話しいただきました。眞下祥幸さんは江戸東京博物館学芸員で、第8回「近世多摩川と分水」の際に玉川上水のお話をいただきました。それから第9回に小野一之さん、現在は大東文化大学非常勤講師ですが、府中の郷土の森博物館の館長を長いことされてきました。パネルディスカッションが終わりましたら、最後に京浜河川事務所から閉会の挨拶という形で本日の予定を組んでおります。

それでは、基調講演に移りたいと思います。

第3回多摩川流域歴史シンポジウム

「多摩川史のまとめ」開催報告

2021年9月26日(日) 13:30~16:50

場所：日野市東部会館内ホール

参加者：57名(WEB) 主催：多摩川流域懇談会

基調講演

「河川工学から見た多摩川の歴史」

知花 武佳氏(東京大学大学院工学系研究科准教授)



しますので、それが合っているのかもぜひ教えていただければと思います。



1 自己紹介

皆さん、改めましてこんにちは。東京大学の知花と申します。

本日はこのような機会をいただき、ありがとうございます。今日は「河川工学から見た多摩川の歴史」というタイトルで発表させていただきます。よろしくお願いいたします。

まず自己紹介を申しますと、私は現在、東京大学で河川工学を専門に研究しております。出身は関西です。関西で中学受験や高校受験をしようとする、社会科が必要ない学校が多いのです。私のように戦略的に受験勉強だけしてきた人間は、社会科はなるべく勉強せず、その時間を全部算数や数学、理科に注ぎ込んできたので、日本史とかは多分40点を超えたことはありません。なので、そういった人間が今日、歴史の専門家の皆様の前で「歴史」というタイトルをつけた話をするというだけでも、非常に緊張しております。ただ、昔の反動からか、最近はこちらにいらっしゃる皆様の博物館や資料館にもよく伺いしておりますし、頂いた発表の講演資料も非常に楽しく勉強させていただきました。私がふだん研究している観点と皆様の歴史との接点が見つかればと思っております。では、内容に入っていきます。

2 講演概要

タイトルスライドの写真は大丸用水堰です。私はこの場所を何度か訪れたことがありましたが、今回このテーマを頂いてから、たくさんの資料や地図を見て検討し、改めて大事なポイントであることが分かりました。なぜ国府がここに置かれたのかということも、川の中から見ると少し見えてきたような気も

本日のお話ですが、最初に、河川工学とは何かということをお話したいと思います。私の講義では、河相と流域景観というものが出てきます。

「河相」は安芸皓一先生が定義された言葉で、川のあるがままの姿と定義されており、古くに「河相論」という本も出されています。「流域景観」という言葉は、人によっては河川景観や土地景観と様々な言い方をします。簡単に言いますと、河相というのは、物理的な土砂と水と栄養物質の相互作用でできる姿を私は河相と定義しています。景観というのは見た目という意味もありますが、もう少し広い意味で、川を中心としているいろいろな人や生物がどういった営みをしているのかまで含めています。なので、この辺で少し歴史と接点が出てくるのではないかと思います。

次に2番目にお話しする多摩川の河相に関するお話ですが、最近大きな石がありません。昔はあったはずですが、それが砂利で埋まっているのです。

もう一つ、多摩川の流域景観に関するお話ですが、人口密度に着目しますと、多摩川は日本の中でもトップクラスの人口密度を誇っている地域を流れています。そうすると、川を中心にした人の暮らしは見にくくなります。今日のお話は羽村堰から河口である羽田空港までのいわゆる平野区間を中心に話しますが、この区間の変化が非常に見づらくなっています。昔はもっとメリハリがあったはずだというのが2番目の話です。

第3回多摩川流域歴史シンポジウム 「多摩川史のまとめ」開催報告

2021年9月26日(日) 13:30~16:50

場所：日野市東部会館内ホール

参加者：57名(WEB) 主催：多摩川流域懇談会

3番目の話は、私どものグループでずっと研究してきた成果のまとめです。人と川の距離が近いかな否かという話ですが、物理的ではなく精神的な距離です。川をよりよくしようとか、どうやったら子供たちを川で遊ばせられるかとか、そういったことを考えている地域かな否かです。すなわち、人と川の距離が近いというのは、人の意識が川に向いているということです。そういう地域に共通する要素として、中流域だと取水堰の存在があります。下流域だと河岸あるいは渡し場があります。今日は多摩川についてもこれらの特徴に焦点を当てて私なりの分析を試みました。こういったものがあるところは地域の人の川に対する関心が高くなっていると思います。これは、今後の河川教育や防災を考えていく上でも非常に重要になってくるかと思えます。

4番目が一番お話ししたいこととなります。河川工学や河川管理では、河川を縦断方向に見たときに、勾配が急変する地点に注目することがあります。この勾配変化点を押さえるということが非常に大事になってきます。勾配変化点を境に、川の特徴や川と人との関わり方が大きく変化します。人の活動を一度抜きにして、粛々と川の勾配が変化する地点を探すと、多摩川には大きく変化する箇所が3つあります。1つ目は六郷で、ちょうど東海道がクロスするところです。2つ目が丸子で、中原街道がクロスするところです。3つ目は是政です。先程、大丸用水堰の写真をお見せしましたが、あの地点でして、府中街道がクロスします。この3つが勾配の大きく変化するところです。

続いて、大山街道の二子玉川、日光街道の拝島がその次に注目すべき勾配変化点です。勾配変化点なので大きく変化するところと小さく変化するところがあるのですが、ここの2か所は上記3か所の次に変化するところです。鎌倉街道、甲州街道は、川を横断する場所と勾配変化点との関係が見えにくいです。

いずれの話にも共通するのは、様々な特徴の根源というのは地理にあるということです。今の勾配変

化点と縄文時代の勾配変化点は違っているはずですが、そんなに大きくは変わらないだろうとも考えています。勾配が変化するには、何らかの理由があるからです。

一番申し上げたいのは、今の川の姿、つまり河相と流域景観といったものに、先生方が調査された遺跡や歴史的な文書を補完すれば、今後活かせる新しい知見が得られるんじゃないかということです。逆に言うと、そういったことをやってこなかったというのが私どもの反省です。

3 河川工学からみた多摩川の歴史

① 河川工学とは

ようやく中に入ります。河川工学の定義ですが、高橋裕先生の教科書の定義が、私としては一番全てを言い表しているように思います。高橋先生によると、「河川工学は、自然の一部としての河川と、それに働きかける人間との、より高次元調和を求めるための技術行為の基礎を探究する学問。」と定義されています。私が先ほど言いました河相で言うと、川の中で石ころがどう動いてどんな地形ができるか、あるいは洪水対策でどんな護岸を造っておけば安定するのか、あるいはどれぐらいの雨が降ればどれぐらいの洪水になるのか、森林で覆われている山と住宅地ではどのように洪水が違うのかとか言った話題も河川工学の範疇でありますし、流域景観で言うと、関連する法制度の話なども入ってくるわけです。つまり非常に範囲が広い学問になります。なので、先生の得手不得手で、どうしても重心を置くところが少しずつ違うということも特徴かもしれません。

ちなみに、私が現在の河川工学の講義で扱っている、あるいは今後扱おうとしている歴史パートに出てくる歴史上の人物をざっと並べてみました。素盞鳴尊を入れていいのかというのはありますし、八岐大蛇退治の話は諸説ありますが、斐伊川の河川の特徴を表す上で使用します。河川工事や河川に関わる改修は仁徳天皇から始まります。茨田堤とか堀江の開削から始まり、行基、空海の池溝の整備がありま

第3回多摩川流域歴史シンポジウム 「多摩川史のまとめ」開催報告

2021年9月26日(日) 13:30~16:50

場 所：日野市東部会館内ホール

参加者：57名(WEB) 主催：多摩川流域懇談会

ろがあるかないかというのは重要になります。20センチの石があると、周りにある細かい石は大きな石の陰になって、ちょっとした洪水では流されずに残ります。だから20センチ以上の材料があると、川底の材料は多少大きな洪水が来ても流れてしまうことはありません。動いたとしても大きな石はゆっくり動くので、砂利もゆっくり動くということになります。しかし、このコアになる20センチを外してしまうと、砂利は大きな洪水が来ると全部流れてしまいます。すべて流れ切ってしまうときもあります。なので、大きな石が入っているかどうかというのは大きな違いです。

ちなみに、支流の浅川も砂利ばかりになり、洪水が来ると川底の砂利がなくなってしまう状況なので、川底が安定するように大きな石や石を詰めた袋を放り込んでいます。それくらい大きな石は大事なのです。しかし、多摩川は現状大きな石がありません。下流まで調査しましたが、27.9キロの押立のあたりや19.9キロの二子玉川の少し上流では3センチです。ここでは、小さい石で1センチ、大きい石が5センチですから、小作堰の上流とあまり変わらない砂利だらけということが多摩川の特徴になっています。

なぜなのかについて、多摩川上流の地質図を示しますと、真ん中にあるのが小河内ダムと奥多摩湖です。ここが四万十帯。要は中生代後期白亜期にプレートが日本列島の横で沈み込んで、その上に乗っかっている堆積物を大陸に押しつけてできた付加体というものです。四万十帯より少し年代が古いものがジュラ紀の秩父帯です。多摩川ではすごく上流のほうに花崗岩も入っています。



この地質は河相を考える上で非常に大事です。例えばここに4つ写真を示します。左上は新潟県の関川、右上は長野県の中房川、左下が山形県の最上川、右下が多摩川です。関川は少し赤茶けており、大きな石がごろごろしています。中房川は大きな石がごろごろしていると同時に砂もたくさんあります。多摩川は硬い岩盤の周りに砂利があります。最上川は茶色い粘土が固まったような柔らかい岩盤をしています。結局この差をもたらしているのは地質で、左上が火山岩、右上が花崗岩、左下が新第三紀の堆積岩、右下の多摩川が中生代の堆積岩というように違うのです。

風化の不連続性		基岩	岩塊	礫	砂利	砂	粘土
火成岩	深成岩	花崗岩	○	○		○	
	火山岩	安山岩	○	○			
堆積岩	中生界	砂岩	○		○	○	
	新第三系	砂岩	○			○	

なぜ違うかというのと、風化の不連続性というのが影響しており、要は安定できる石の大きさが違うということです。左が地質の種類で、右が石の大きさです。丸をつけているところが安定しやすい大きさだと思ってください。花崗岩だと大きな石とか岩の塊が安定しますが、礫、砂利はあまり安定しなくて、「マサ」という砂ではまた安定します。火山岩は複雑で、大きな石で安定しそれ以下の大きさは出にくいのです。しかし、火山があると火山砕屑物や火山灰が出てくるので、もっと様々な種類のものが出ます。それは確かにそうですが、岩としては大きなものが安定しやすいです。しかし、多摩川の流域で言うと、中生界、新第三系がメインになってきますので、そもそも基岩が風化すると大きな岩塊は出にくいのです。表の中で礫が消えています。礫ぐらいは出ます。しかし、岩塊についてはあまり出ないというのが一つの特徴です。

第3回多摩川流域歴史シンポジウム 「多摩川史のまとめ」開催報告

2021年9月26日(日) 13:30~16:50

場所：日野市東部会館内ホール

参加者：57名(WEB) 主催：多摩川流域懇談会

こちらは、多摩川の上流で撮った写真です。上流へ行くと、山で大量の細かい砂利が出てくるのがわかります。以前の歴史セミナーでも出ていましたが、山のほうに行けば石が大きくて、中流に行けば小さくなって、下流に行けば砂利になって砂になります。小学校では、最初は大きな石だが、石と石がぶつかって摩耗して削れて細かくなり、海に行く頃には砂になりますと言われます。しかし河川工学では、これは2つあるセオリーのうちの1つなのです。これは摩耗説というもので、実は河川工学のほうでは重視しないことが多いです。



もう一つが分級説です。大きな石は急勾配のところだと流れるが、勾配が緩くなってくるとそれより先に行けなくなり、止まってしまいます。一方、砂利とか砂は遠くまで運ばれるので河口まで行きます。なので、風化の不連続性によって出てくる粒度分布はある程度山で決まってしまう、それがしかるべき位置まで流れていっているというのが分級説です。

どっちの説が正しいかということではなく、いずれにせよ山から砂利が出ているということがポイントとなります。例えば、これは沢井の写真です。御岳渓谷では、10センチを超えるものはほとんどありません。昔からこうだったわけではなく、砂利で埋まったのです。



多摩川は砂利採取で砂利が採取されていました。砂利をたくさん取ることによって、川底がどんどん下がっているという事実と、砂利ばかりになって困っているという事実は矛盾しているように思えます。例えば、多摩大橋にある、昭島クジラの化石が出た170万年前の海底堆積物が固まった岩盤では、上に乗っていた砂利とか石がなくなっています。それが実は昭和38年の写真を見ると、大きな石しかありません。もともとは大きな石も砂利もあったはずですが、砂利を取る目的はコンクリートの骨材ですので、大きな石は邪魔になります。年配の方に聞いても、大きな石がごろごろ転がっていたと言います。では、その石はどこに行ったんですかと聞くと、知らぬ間になくなったと言われました。砂利がなくなったので転がりやすくなって無くなったという説もありますし、誰かが使ったという説もあります。とにかく最初に取り除かれたのは砂利です。しかし、なぜか巨礫はなくなってしまいました。巨礫がなくなった後に砂利だけは回復してきます。

これを考えるときに大事なことは、多摩川の流路はおおよそ現在の流路になってから1万年ぐらいは動いてないということです。その間のいつか堆積した大きな石を取るということは、川にとっては大打撃だと考えています。

2002年に秋川で砂利の堆積がひどいということで調査を行いました。その際、秋川漁協の方に最近の秋川の問題は何かと聞くと、4割ぐらいの人が、早瀬にあった大石がなくなり、淵が砂利で埋まったと言いました。大きな石があると瀬・淵もあるが、大き

第3回多摩川流域歴史シンポジウム 「多摩川史のまとめ」開催報告

2021年9月26日(日) 13:30~16:50
 場所：日野市東部会館内ホール
 参加者：57名(WEB) 主催：多摩川流域懇談会

な石がなくなって砂利になると真っ平らになるということ。多摩川に関して言えば、私が研究していた10年前と今を比べても真っ平らになってきます。

物部川でも同様の問題が発生(秩父帯の特徴?)



物部川(高知)

その後、高知県の物部川に行ったときに同じ話を聞きました。秋川で調査したときにいろいろな人に理由を尋ねたところ、スギを植えたせいだと言う人が一番多くいました。スギは根が浅いので台風のために倒れ、砂利が出るのだという話が出てきました。奥多摩周遊道路を造った工事が原因だという説もありましたが、それだと北秋川でも砂利が出ている説明がつかないですし、さっきの沢井が砂利だらけなのも変です。秋川と物部川の共通点は秩父帯であり、ここは破砕帯だということです。しかし、それは昔からの特徴のほずで、それに加え、何らかの人為的な影響で砂利が出ているということは言えそうです。こうして、川底にあまりメリハリがなくなったというのが特徴となります。

物部川でも同様の問題が発生(秩父帯の特徴?)



物部川(高知)

河相の話をしてきましたが、ここからは流域景観に関して違う話をします。「子どもの水辺」、あるいは「水辺の楽校」というものがあります。これは

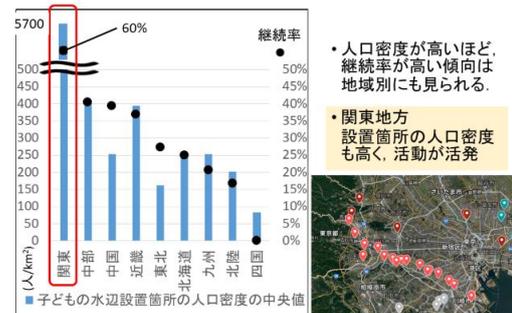
子供たちが安全に川のことを学べるように、ある場所を整備して、地域の人も交えて子供たちの環境の教育をやっという場所です。2000年に始まりましたが、10年かけて一気に300ぐらいの登録がなされました。しかし、それ以降だんだん頭打ちになりました。

全国に設置された「子どもの水辺」は調査時点で全国に236ありました。このうち、活動を確認できたのは80と4割弱でした。中山間地や余り人が来ないところにつくったため、誰も管理しなくなったとか、最初は頑張っていたがだんだん力尽きてきたという所が多くあります。

そういった中で活動が継続している地域を日本全国マップに落とすと、多摩川だけ浮き出てきます。他の川だと数箇所しかなく、その数箇所ですら活動が確認できないというところもたくさんあるにもかかわらず、多摩川は青梅から河口まで満遍なく活動継続箇所が浮き出てきます。隣の荒川を見ると、人口密度は多いですが、子どもの水辺はあまり多くありません。

多摩川における「特異な」子どもの水辺

山崎ら2018:「子どもの水辺」における河川学習活動の分析と河川特性ごとの活用ポテンシャルの提示



この表は横軸が川幅、縦軸がその地域の人口密度を表しています。「子どもの水辺」で活動を継続している割合を見ると、一番上の6,000~だけ抜きにして、(50)~100という縦の列が15%ととても低くなっています。川幅が50メートルを切るとある程度継続されており48%になります。一方で、逆に100~200メートルになるとまた49%となりますが、なぜか50~100だけかなり低くなります。50メートルを切ると、小さな川なので中に入って活動がしや

第3回多摩川流域歴史シンポジウム 「多摩川史のまとめ」開催報告

2021年9月26日(日) 13:30~16:50

場所：日野市東部会館内ホール

参加者：57名(WEB) 主催：多摩川流域懇談会

すいのです。100メートルを超えると河川敷が出てくるので、活動拠点ができやすいのですが、50~100メートルの川は入るには深いし、遊び回る河川敷はありません。ですが、人口密度が6,000人を超えてくると、何かしら工夫して活動するのか、差が見られにくくなります。

川幅で活動しやすさは変わるが、人口密度が6000人/km²を超える自治体では差がない。
山崎ら2018:「子どもの水辺」における河川学習活動の分析と河川特性ごとの活用ポテンシャルの提示

継続率	川幅 (m)					計	
	~25	~50	~100	~200	200~		
人口密度 (人/km ²)	6000~	71%	75%	100%	91%	100%	85%
	~6000	47%	78%	9%	50%	50%	45%
	~700	11%	50%	50%	40%	50%	40%
	~300	13%	33%	0%	25%	75%	23%
	~100	15%	23%	0%	17%	-	13%
計	25%	48%	15%	49%	65%	36%	

1. 人口密度が6000人/km²以上で活動は継続しやすい。
2. 川幅が50~100mで、活動が行いにくい。

川について言えば、川幅が重要な要因になる。対岸にいる人の「顔の表情がわかる距離」(20mぐらい)から「人の動作がよくわかる距離」(100~120mぐらい)の川は、いわゆる人間のスケールの親しみやすさを感じさせる。これは人物が河原の中で点景としての訳を果たしうる距離の限界と考えると良い。それ以上の川幅になると、対岸には見えない大きな建築や山岳が欲しくなくなる。(中村良夫「風景学入門」)

もう一つ別の研究を紹介します。最近「流域治水」という言葉が出てきており、流域で人の住まい方をもう一度見直さなければいけないという動きが出ています。すると、人はなるべく低地から退いて、高台で暮らそうということになります。これは妥当ですが、実は3パターンあるのです。

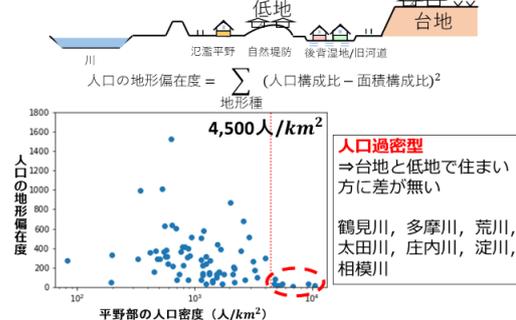
1つのパターンは、高台で暮らそうといっても、低地しかない川です。そんなところで高台移転と言われても、かなり遠くに引っ越さない限りできません。そういった川がたくさんあります。

残りの2つは、高台と低地がある場合ですが、1つは低地が田んぼになっていて高台が住宅地になっている川です。これは、洪水のリスクがあるところに人がいないので治水は非常に合理的です。ただ歴史的に考えると、どうして高台みたいに水が取れないところに人が住めたのかという話になります。共通して言えるのは、古い時代に用水が引かれ、江戸時代には少なくとも高台の上である程度の集落が発展しているようなところだと考えられます。3つ目は、せっかく高台があるにもかかわらず低地に人が集中している川です。台地は上流の河岸段丘で、人が暮らしているのは河口付近の低地という状況が多いです。

このように3種類のパターンがありますが、全く見えない川もあります。ここでも、人口が過密になると、台地にも低地にも同じように人が住んでいるので、台地の上に集中しているのか低地の上に集中しているのか判断ができなくなります。このグラフの縦軸は、例えば台地が6割、低地が4割の流域で、人口も台地が6割、低地が4割といった場合に0になります。この住まい方が偏ると値が大きくなります。つまり、台地6割、低地4割であるにもかかわらず、人口は低地7割、台地3割とかだと値が大きくなります。ここでは4,500人/km²というのを超えると差がなくなっています。どんな流域かという、右下に書いていますが、有名な都市河川ばかりです。多くは国土交通省の計画規模が200年に一回の洪水に備えようと言っているような川ばかりで、多摩川も当然この中に入ってきます。

流域(平野のみ)の人口密度が4500人/km²を超えると、人口が「低地か台地か」に偏らない

村井ら2018:「居住地の地理的特性に着目した流域の類型化-流域治水の施策検討に向けて」



これまでの研究をすべてまとめますと、昭和30年代ぐらいまで遡れば、まだ巨礫もあり河相にはメリハリがありました。人口も今ほど多くはなかったため、川との接し方にも、住まい方にもメリハリがあったので、それぐらいの時期まで遡れば、多摩川の河相にも流域景観にもかなりのメリハリが見えたはずですが。そういう意味では、この頃が多摩川の記憶がきちんとある方にきちんとその状況を聞いておかなければなりません。今の多摩川見ても、川の中も平坦、人の接し方も住まい方も平坦という状況です。

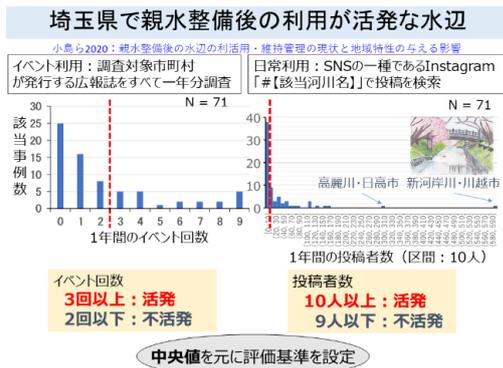
このような多摩川で人と川の関わりの特徴を模索してもなかなか難しいので、田園地帯の残る低地や山麓の農村地帯で研究をしてました。

第3回多摩川流域歴史シンポジウム 「多摩川史のまとめ」開催報告

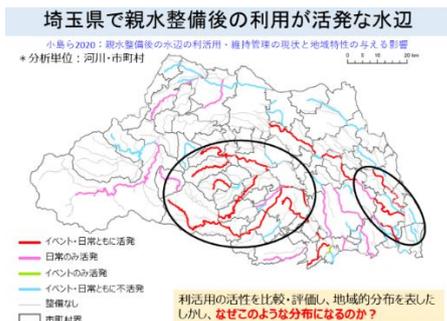
2021年9月26日(日) 13:30~16:50
 場所：日野市東部会館内ホール
 参加者：57名(WEB) 主催：多摩川流域懇談会

③ 川と人の距離が近い場所に関する研究報告

次に紹介するのは、どれぐらい人が川を利用しているのかという話です。左の図は、対象とした市町村の広報誌を1年分調査し、実施されたイベントの回数を整理したものです。右は、SNSやインスタグラムでどれぐらい川に関する投稿があるのか整理したものです。右が日常利用で、左がイベント利用ということになります。右を見ると、インスタグラムで川の名前が出てくることはあまり多くなく、ほとんどの川は1年を通して10人以下です。しかし、〇〇川散歩しましたとか、〇〇川に行ってきましたという投稿が多い川もあります。また、左を見ると、年間に3回以上イベントをやっている川もあることがわかります。



こういったところで、日常利用、イベント利用の双方の観点で活発なところと、いずれも活発でないところを見ると、地図上に特徴が出てきます。赤で示す川は、インスタグラムを見ても頻繁に名前が出てきて、広報誌でもイベント情報がたくさん出てくる川です。しかし、その場所には偏りがあり、真ん中が抜けていて、右と左に散っています。



埼玉の中小河川を歩いていると、とてもいい水辺があります。草が刈られていてきれいに整備されて、ごみ一つ落ちていません。それが、ずっと川沿いを歩いていると突然やぶに変わって、不法投棄だらけになるときがあります。なぜ急に変わったのかと思うと、それが見事に市町村界であることが多いです。この感覚は多摩川ではあり得ませんが、他の川ではよくあることです。

これは、「〇〇市は川のことを一生懸命考えているのに〇〇町は全然考えてない」というわけではなく、歴史的背景があることが多いのです。先に答えを言うと、小さいときに川で遊んだ経験のある人が今高齢になり、子供たちに何とか川の良さを伝えたいというので、草刈りなどの様々な活動をしているところは良いのですが、そもそも年配の人が新住民だとか川で遊んだ経験がないとか、そういう人が多い地域では、何も起こりません。行政に川をなんとかして欲しいということもありません。

では、このような昔から川と関わりを持っている人たちがいる地域はどこかというところ、山麓のほうだとほぼほぼ取水堰のあるところ、田んぼに水を引く堰があるようなところは、堰の維持管理をしなければいけないので、地域の人はいまだに河川を管理しなければいけませんし、川の水の恩恵をいまだに受けています。なので、山麓のほうだと農業用の取水堰の周りで、草刈りなどを地元住民の人がやっているということが多いです。



一方、真ん中が抜けて下流のほうに行くと、街道と河川の交点、さらに舟運で栄えた地域は、江戸時

第3回多摩川流域歴史シンポジウム 「多摩川史のまとめ」開催報告

2021年9月26日(日) 13:30~16:50

場所：日野市東部会館内ホール

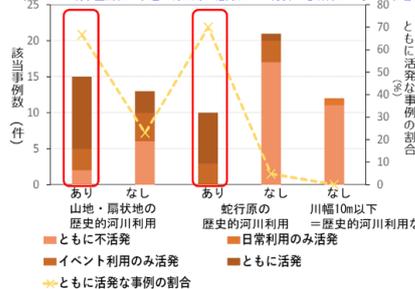
参加者：57名(WEB) 主催：多摩川流域懇談会

代には既に大きな集落が発展しています。そこで育った人たちは、昭和30年より前には川で遊ぶなど、川との深い関わりを持っていました。しかし、もともと田んぼだったところを高度成長期に急に市街化したところは、川で遊んだ経験のある人たちではないので、何も起こりません。ただ、下流の川への意識が高い場所では自分で草刈りをしている人もいますが、地域の人が行政に訴えて、草刈りをしてもらって良い状態を維持している場合が多いです。要は、既に川の恩恵には受けていないわけです。川を何とかしたいという気はあるが、我が事ではないというのが現状です。

なので、堰や河岸、渡し場が大事だというのがこの研究のポイントになります。この図は数値で表したもので、そういった堰のあるなしや河岸のあるなしとイベントの活性度を比較した図になります。今話したことが一応数値としても出ていることを示しておきます。

歴史的利用は現在の利活用に大きな影響を与える

小島と2020：親水整備後の水辺の利活用・維持管理の現状と地域特性の与える影響

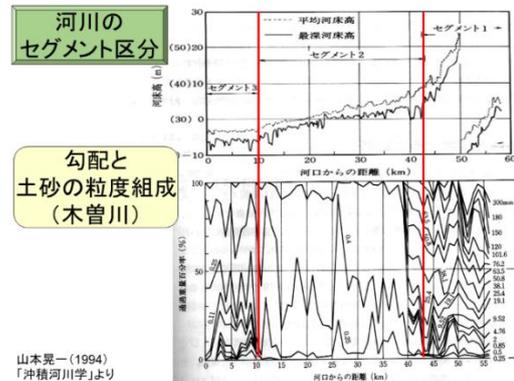


山地・扇状地の歴史的河川利用=取水13カ所、河岸0カ所、両方2カ所
蛇行原の歴史的河川利用=取水2カ所、河岸6カ所、両方2カ所

④ 多摩川の「セグメント」と勾配変化点の意義

ここがメインパートです。多摩川のセグメントと勾配変化点というお話をしたいと思います。セグメントという概念についてですが、河川工学では有名な概念ですが、一方で分野外の人には分かりにくいということもよく言われます。これは山本晃一先生が提唱された概念ですが、先生の教科書から木曾川の図を持ってきました。上が木曾川の縦断面図です。下は、川底の石の大きさです。上の図のセグメント1と書いてあるところは急勾配です。それが、ある

ところを境に急に勾配が緩くなります。これがセグメント2です。最後に、あるところを境に急に真っ平らになります。これがセグメント3です。



山本晃一(1994)「沖積河川学」より

なぜはつきり変化点ができるのかというと、1つは、先ほど話した様々な大きさの石ころが産出される中で、ある特定のサイズが抜けるということです。例えばこの地域だと、1から10ミリはほとんどありませんので、それに該当する勾配もなくなります。1つの関数で縦断面形を表現するという方法がよく用いられますが、途中で傾きが急変することがあるので必ずしもきれいに当てはまらないのです。分かりやすく言うと、セグメント1は扇状地で、セグメント2は自然堤防帯と言われるところです。要は扇状地が終わって平らな部分です。ここは自然堤防帯と言われることが多いですが、私は中央大学の鈴木隆介先生の提唱される蛇行原という名称で呼びます。要は扇状地が終わって三角州に至るまでの真っ平らなところで、川が蛇行するところです。セグメント3は三角州です。なので、セグメント1、2、3と呼ぶだけでなく、扇状地と蛇行原と三角州と呼べばいいのですが、必ずしも一致するわけではないのです。例えば多摩川の扇状地がどこからどこまでだというのは、様々な定義ができますが曖昧です。一方で、勾配がどこで変わるのかは明確に定義ができます。

下の図は、上が100%、下が0%で、何ミリ〜何ミリの石が何%占めているかを示しています。例えば、一番右端の55キロ地点だと300ミリ以上があります。先ほど多摩川では20センチ以上の石がないと言いましたが、こちらの扇状地には30センチ以上がありま

第3回多摩川流域歴史シンポジウム 「多摩川史のまとめ」開催報告

2021年9月26日(日) 13:30~16:50

場所：日野市東部会館内ホール

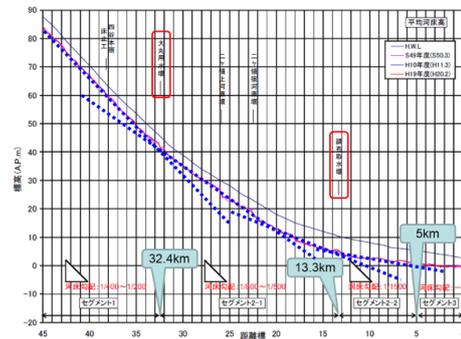
参加者：57名(WEB) 主催：多摩川流域懇談会

す。しかし、セグメント2になると大きな石はほとんどありません。1ミリから10ミリはなく、10ミリ以下だと0.1から1ミリしかないのです。河口付近になると、細かいものが塊になったりして複雑になるのですが、このように勾配と石の大きさは本来対応しているはずです。

平野について、川の勾配が急なところに大きな石があるのか、大きな石があるから川の勾配が急でいられるのかというのはなかなか言いにくいです。相互作用で決まってくるので、平野に入ると川底の石ころの大きさや川の曲がり方、勾配が大体対応すると言われています。要は相互作用系で各指標のオーダーが大体決まってくるということです。

では、多摩川のセグメントはどうなっているかというのを国土交通省の維持管理計画で見てみます。そうすると、大丸用水堰までがセグメント1で、勾配が400分の1より急になっています。次のセグメント2は、2-1と2-2に分かれています。1も3も幾つにも分けられますが、2-1と2-2は結構違います。扇状地で見られる大きさの石もあって、いわゆる中流の礫河原の風景があるのが2-1です。2-2になると、河原らしい河原はありません。多摩川の下流をイメージしていただければ分かりますが、河川敷があって、その前を深い川が流れているというのが2-2です。2-1は砂利や砂の河原がありますが、扇状地のような勾配はないですし、白波が立っているような瀬も見られません。なので、2-1と2-2は河相が違ってきます。3は三角州なのでまた違いますが、2-1と2-2というのは分けられることが多いです。なにより、一番違うのは、石ころの大きさです。それと、先ほど話した河原の有無が違ってきます。

多摩川のセグメント区分(多摩川維持管理計画より)



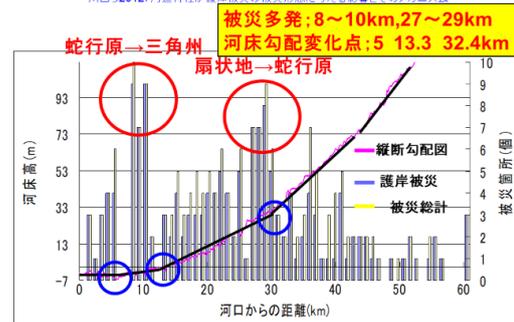
セグメント1の終わりは大丸用水堰ですが、セグメント2の終わりは5キロ地点で、その後セグメント3が始まり、真っ平らになります。大丸用水堰と5キロ地点の間で河相が変化する地点は調布の取水堰です。ここが大きな勾配変化点であり、2-1と2-2に分かれます。2-1はさらに宿河原か二子玉川のあたりで特徴が変わります。実際、二子玉川に小さな勾配変化があります。

このように、大丸用水堰、調布取水堰、5キロと勾配変化点が幾つもの解像度で分けられます。5キロは東海道がクロスするところですが、この3か所は勾配変化点としてちゃんとした特徴を有しているということを次に示しておきます。

棒グラフで示されているのは、1974~2007年の間で護岸がどれだけ壊れたかです。護岸が壊れた数には30キロと10キロにピークがありますが、ここはちょうど勾配が変わるところの2~3キロ下流です。これは証明できていませんが、勾配が急なところから緩くなるところに行くと土砂が堆積し、川が不安定になりやすいと理解しています。変化点より少し下流で河道が振れやすいという特徴が見られそうです。

勾配変化点と護岸の被災(1974~2007年)

川口ら2012: 河道特性が護岸被災の被災形態に与える影響とそのメカニズム



第3回多摩川流域歴史シンポジウム 「多摩川史のまとめ」開催報告

2021年9月26日(日) 13:30~16:50
場 所：日野市東部会館内ホール
参加者：57名(WEB) 主催：多摩川流域懇談会

なので、私は勾配変化点=不安定と考えていましたが、勾配変化点自体は河道が安定していることが分かってきました。勾配変化点でちょうど川の位置が決まり、2~3キロ下流でぶれます。それで、セグメント1と2-1の境界と、2-1と2-2の境界のそれぞれ少し下流で護岸の被災が多いということです。2-2と3の境界は、そこまでピークは出ていません。

河口から羽村堰までについて、セグメントの境界と、セグメントの境界とまではいかずとも勾配が変わるところ、これが1つ目の着眼点です。2つ目の着眼点は先ほどの研究紹介でも出てきました街道と渡しです。多摩川を横断する街道や渡しはたくさんありますが、江戸時代の地図をベースにつくった地図にちゃんと出ているものとか、以前御講演のあった「調布玉川惣画図」でちゃんと舟の絵が描いてあるものを中心に分布を示したのがこれです。ここにも示している、3つ目の着眼点は堰の場所です。

多摩川の堰・主要街道と渡し・勾配変化点・河道の特徴	
セグメント境界	5.0km (もともと5.5km?)
東海道・六郷の渡し	5.6km [川幅79m 水深3.5m] (砂丘の存在・流路安定)
鎌倉街道・矢口の渡し	8.5km [川幅73m 水深2.3m]
護岸の被災多し	10km (迅速測図ではここまで)
中原街道・丸子の渡し	12.8km [川幅102m 水深1.6m]
調布堰・セグメント境界	13.3km (台地との接点・流路安定)
大山街道・二子の渡し・サブセグメント境界	17.8km [川幅38m 水深0.8m] (河川歴史図)
津久井道・登戸の渡し・二ヶ嶺河原堰	22.5km [川幅54m 水深1.5m]
→ 調布玉川	25.9km
稲毛道・押立の渡し	29.0km [川幅44m 水深?m]
護岸の被災多し	30km
府中街道・足政の渡し・川船の終点	31.5km [川幅38m 水深1.5m]
大丸用水堰・セグメント境界	32.4km (台地との接点・流路安定)
鎌倉街道・関戸の渡し	34.6km [川幅36m 水深?m] ⇒ 大正時代は幾筋かの細流
→ 調布玉川	35.9km
吉田街道・石田の渡し	38.4km
吉田街道・万福寺の渡し	39.0km [川幅61m 水深?m]
府中用水堰	39.5km (台地との接点)
甲州街道・日野の渡し	40.2km [川幅76m 水深?m] ⇒ [川幅46m 水深0.8m]
古藤街道・柴島の渡し	41.3km [川幅57m 水深1.5m] ⇒ [川幅46m 水深0.8m]
日野用水堰	45.2km (台地と台地の接点・高砂砂丘)
日光街道・拝島の渡し	46.3km [川幅58~63m 水深1.0m]
昭和用水堰・秋川合流・サブセグメント境界	47.8km
伊那道・熊川の渡し	49.2km [川幅46m 水深0.5m]
五日市街道・牛浜の渡し	49.4km [川幅52m 水深1.2m]
羽村堰	53.9km

勾配変化点と主要な街道及び渡しと堰の場所、今日はこの3点が集中する場所が幾つかあるということをお願いです。一番下流側は東海道と六郷の渡しで、セグメント境界が5キロです。ただ、資料をいろいろ見てみると、もともとは5.5キロ付近に境界があったという文書もありますが、セグメント境界は今と昔で1キロくらいは変動していると考えていいかと思います。少なくともこのあたりで勾配が変わるといふことと、そこを東海道が走るということは無縁ではなさそうです。

なぜかという、ここには古い時代の砂丘があり、それを削って流れる川の流路はぶれていません。そ

の上流に行くと、鎌倉街道もありますが、次に注目すべきは調布堰で、セグメント境界にもなります。そのすぐ横に中原街道や丸子の渡しがあって、少し下流で護岸の被災が多くなります。

また、迅速測図で見たときの石、礫河原というのはここまでです。ここから下流に石の河原は見られず、砂となります。これが2つ目のスポットです。その次は、セグメントほどではないが勾配が変わるサブセグメントで、二子の渡しのある二子玉川のところ。ここでも河相の特徴が変わりますが、ちょうど大山街道が来ています。さらに上流に行くと、次に来るのが大きな勾配変化点でセグメント境界32.4キロの大丸用水堰です。その下流に府中街道と足政の渡しがあり、もう少し下流で護岸の被災が多いところが出てきます。

実はその上流、関戸の渡しから柴崎の渡しまでは、多摩川で最も扇状地っぽい扇状地で、流れが不安定です。ただ、これが大丸用水堰に来ると流路の位置が安定します。さらにその上流に行くと、台地と台地の間に挟まっているので明確ではないですが、日光街道や拝島の渡しの少し上流に昭和用水堰があり、特徴が変わります。川が合流することでも特徴が変わるので、この辺が勾配変化点と対応するかははっきりしません。

羽村堰53.9キロが、扇状地のトップとは言いませんが、台地との接点の一番大事なところに築かれているということになります。この地理院地図の治水分類図は私どもにとって不可欠でして、これを下流から順番に見て行きます。まず下流の様子を見ると、砂丘がちょうど5キロの地点で、この上流で大きく旧河道が蛇行していますが、この砂丘でそれが止まっています。これが先ほどの5キロ地点のセグメント境界に該当します。

そこから上流にいくと、多摩川台の古墳群が出てくるまでの間は昔の河道が蛇行しており、多摩川の東京側と川崎側で同じ地名が見られるのは、実は旧河道で分かれているという解説がよくされます。

第3回多摩川流域歴史シンポジウム 「多摩川史のまとめ」開催報告

2021年9月26日(日) 13:30~16:50
場 所：日野市東部会館内ホール
参加者：57名(WEB) 主催：多摩川流域懇談会



ポイントは、この多摩川台の古墳群がある場所では遺跡もいっぱい出ていますが、多摩川の流れはここに必ずぶつかり、あちこちに行かないということです。なので、このすぐ横には旧河道がないのです。そしてこの場所で一度安定した後、不安定になるので、その下流にはたくさんの旧河道が存在します。そういった川が動かないところをねらって街道があります。もちろん台地と低地の関係が大事だと思いますが、川の特徴だけからいっても、中原街道や丸子の渡し、調布堰はピンポイントで安定するところです。

川の話で言うと、護岸の被災が多いところは、迅速測図で礫河原となっています。この下はしばらく河原がありませんし、その後出てくるのは「砂」なので、ここが最後の礫河原となります。写真で見ても、ちょうどこの台地にぶつかる上流では右と左に交互に河原が見えます。これは交互砂州と言いますが、交互に河原が見えるのはここまでで、ここから下流ではなくなります。ここには中原街道と丸子の渡しがあります。堰も、川があちこちに移動したのでは、毎回造り直さなければならないし、そのたびに用水はどうするのだという話になるので、こういうところでないと堰も造りにくはずです。なのでそういう意味でも、これはかなり重要なポイントになってくるかと思えます。

治水地形分類図で上流側に移動しまして、野川が合流する二子玉川の地点ですが、旧河道は上流からここまでは比較的直線的なのに対し、二子玉川より下流では少し蛇行し始めるので、この付近にも1

つ変化がありそうです。この上下流は定義的にはどちらも2-1ですが、2-1の中にもちょっと上流的なものと同流的なものがある、それが二子玉川のあたりと見えています。



今昔マップで明治時代の地形図を見ても、流路形態が変化するのがわかります。上流側は幾つも細かい流れが割れていますが、台地にぶつかる調布堰のところから下流では形が変わります。下流は河原がなくなり、川幅が大きく変化します。広範囲で流れが右左に行っています。宿河原のあたりで変化を見ることができそうですが、宿河原で少し台地にくっつくという以外は、比較的直線的な旧河道がフラフラしているのが見えるところで、そこまで大きな変化ではありません。



ただ、大丸用水堰から上流はかなり様子が違います。この絵の一番左端に日野用水堰があります。ここにあった柴崎の渡しのところは、台地と台地の幅が狭いですが、その下流では広がります。浅川も、関戸のあたりで合流していたという記述もあったので、柴崎の渡しから下流では、多摩川も浅川も入り乱れながら流れていたと考えられます。旧河道が低

第3回多摩川流域歴史シンポジウム 「多摩川史のまとめ」開催報告

2021年9月26日(日) 13:30~16:50

場所：日野市東部会館内ホール

参加者：57名(WEB) 主催：多摩川流域懇談会

地の北端を走っていたという話もあります。しかし、常にあちこちに蛇行していたという記述もあって、乱れて流れていたと考えられる区間です。



実はここは、等高線が万願寺の渡しの辺りを中心に同心円状に3本見つけることができ、万願寺の渡しのあたりから大丸用水堰まではミニ扇状地になっています。なので、この区間で流れが左右に振れています。この区間は甲州街道や古甲州道がたくさんあるという特徴も、こうした流れに関係しているかもしれません。

そして、台地の形の影響からか、一番北端の流路でも大國魂神社の少し上流では、南西に向かって真っすぐに落ちてくるので、結局右岸側の大丸用水堰のあたりに河道が集中しています。集中するところの北側には大國魂神社があります。

さらに、大國魂神社の前に自然堤防ができており、これを境に、下流側は条里制の遺構がきれいなのに、左(上流)側はあまりきれいでないと、以前の深澤さんの講演録に書かれています。また、ここより上流はセグメント1なので、扇状地の中の扇状地といった河原なのに対し、ここより下流はセグメント2なので、蛇行原の礫河原ができています。

このように、川の特徴は大國魂神社とその前の自然堤防とちょうど大丸用水堰のラインを境に変わることがポイントになってきます。

つまり、川を縦断的に見て行くと、川が左右に振られて変動してきたところと、いつの時代も大体そこを流れていたというホットスポットみたいなところがあるのです。そのスポットには大体堰ができます

し、勾配変化点になりますし、すぐ下流には渡しがあります。さらにその下流になると、流路が左右に大きく振れ始めるので、護岸の被災も目立ちます。このパターンが縦断的に何度か繰り返していると私は今見えています。

4 おわりに

終わりにまとめます。多摩川というのはジュラ紀付加体なのでそもそも巨礫大礫が少ないのですが、砂利採取のインパクトもあって現在は砂利だけになったというのが1つ目の注目点です。2つ目は、人口が過密になっているので、住まい方にも川に対する意識にも差が見られにくくなっているということです。台地の上に人が多い川と低地に人が多い川があり、多摩川も本来は台地の上に人がいて、低地にも少し人がいるぐらいだったと思います。それがいまではまんべんなく人が住んでいます。ちなみに、こうした高度な開発が低地でなされるのは江戸以降です。これ以降の低地の暮らしの話になると、川崎市の歴史の話がおもしろく、有吉堤に至るまでいろいろありますが、それ以前の特徴という、治水史は語りにくい気がします。

そして3つ目のポイントは、河川利用の活性化には川幅も影響しますが、河岸や渡し場、取水堰が重要になるということです。多摩川にはたくさんありますが、それが勾配変化点と合致していて、河道も歴史的に見て安定している場所に設けられていると考えられるというのがメインのお話でした。

そして、これが一番言いたかったところですが、地理をベースに議論していると、現状の河相も歴史的な暮らしも、あるいは今後この川をどうしたらというところもつながってくるのではないかと期待を持っているということです。

以上で私の発表を終わります。どうもありがとうございました。(拍手)

第3回多摩川流域歴史シンポジウム 「多摩川史のまとめ」開催報告

2021年9月26日(日) 13:30~16:50

場所：日野市東部会館内ホール

参加者：57名(WEB) 主催：多摩川流域懇談会

パネルディスカッション

「歴史セミナーを振り返って～多摩川の開発と文化～」

コーディネーター 神谷 博氏

コメンテーター 知花 武佳氏

パネリスト

小田 静夫氏

(東京大学総合研究博物館研究事業協力者)

江口 桂 氏

(府中市文化スポーツ部ふるさと文化財課長)

橋場万里子氏(多摩市文化振興財団学芸員)

望月 一樹氏(神奈川県立歴史博物館長)

眞下 祥幸氏(江戸東京博物館学芸員)

小野 一之氏(大東文化大学非常勤講師)



小田氏



江口氏



橋場氏



望月氏



眞下氏



小野氏

○神谷コーディネーター

では、始めたいと思います。

パネルディスカッションのタイトルは、「歴史セ

ミナーを振り返って～多摩川の開発と文化～」となっています。たくさん内容や切り口がある中で、開発と文化に絞ってみようということですが、それにこだわらずにいろいろお話が出てくるかと思っています。

進め方ですが、パネリストの方が6名いらっしゃいます。お2人ずつ区切りながら進めていきたいと思っています。

では、初めに小田先生と江口さんから始めて、橋場さん、望月さん、それから眞下さん、小野さんと一回りしていきたいと思っています。進め方として、振り返りをそれぞれやっていると時間がかかってしまいますので、「多摩川歴史巡り」の中で要約を念頭に置いて、これから先の話を中心議論していきたいと思っています。

それでは、まず小田先生ですが、この「多摩川歴史巡り」の地図をつくることを御提案いただきまして、おかげさまでこのシンポジウムがお披露目の機会になったということで、大変ありがたい機会をいただいたと思います。

それでは、まずは小田先生、それから江口さんお願いいたします。

○小田パネリスト

私が地図をつくったという話をしましたが、こんな素晴らしいものができてありがとうございました。いろいろな地域で、大きな川をメインにした歴史や研究がたくさんありますが、これだけまとめたものはほかにないと思いますので、自慢していいと思います。

私のほうでは多摩川を考古学的に調べていましたが、いつ頃から多摩川を人間の利用に供したかというのは、多摩川の地質を見ておかないといけないと思っています。今日のお話で、参考になったことが多くありました。

今から多摩川がどういうふうに変遷していくかということで、考古学的には旧石器時代、約3万年前

第3回多摩川流域歴史シンポジウム 「多摩川史のまとめ」開催報告

2021年9月26日(日) 13:30~16:50

場 所：日野市東部会館内ホール

参加者：57名(WEB) 主催：多摩川流域懇談会

から多摩川を利用した遺跡がたくさんあります。その後、縄文時代にも多摩川を利用した集落が弥生時代と続いていきますが、質が違います。旧石器時代は高台に人間が住んで、多摩川という川自身を利用することはほとんどなかったと思います。縄文時代になると今の多摩川と全く同じような景色になり、下流から上流までしっかりと水の流れが出てきますから、そういう沖積世の時代になって初めて、多摩川が人間として価値のある集落、定着した集落がつかれるようになったと思います。それが弥生、古墳、ずっと古代に続いていくのではないかと思います。なので、旧石器時代と縄文時代とは多摩川の景観が全く違うということは、一つ頭に入れておく必要があります。

旧石器時代では、東京湾は湾じゃなくて溪谷です。峡谷のような切り立った崖があって、多摩川はそれを流れていくわけですが、砂利ばかりです。遺跡を掘ってもたくさん砂利が出てきますが、イモ石という、芋みたいな石がたくさん遺跡から出てきます。その頃になって初めて遺跡が出現しているということです。

その後は、武蔵野礫層という武蔵野台地のベースになっている石を利用した、いわゆるふかし芋をつくったような礫群やそのようなものを利用します。縄文になると、たくさん石の斧をつくりませんが、斧をつくるのに多摩川の砂利を打ち割っています。なので、大きい砂利は縄文から始まりました。旧石器時代は、石ころの丸いやつを温めて食べ物に利用したと言われています。そういうような歴史が私の中では見えてきます。

○江口パネリスト

府中市文化スポーツ部ふるさと文化財課長の江口と申します。私は平成27年(2015年)1月の第2回セミナーで、「武蔵国府の成立と多摩川中流域の古代集落」と題してご報告をさせていただきました。6年前の講師、また、本日パネリストとして呼び

いただきましたことを、改めて京浜河川事務所の皆様及び神谷先生をはじめとした多摩川流域懇談会事務局の皆様には厚くお礼申し上げたいと思います。

私からは大きく2点です。まず、古代の武蔵国府について、私は長年、考古学の立場から、国府の成立とその後の展開について調査研究に従事させていただいております。府中市では昭和50年から市民の皆様のご理解・御協力によって、今年で1,900か所近い発掘調査を積み重ねてまいりまして、国内70か所ほどの国府の中でも、最も国府の具体的な街並みの様子が分かってきた国府と申し上げていいと思います。

古代の武蔵国府は、段丘崖から奥へ1キロ近くほどまで街並みがつくられています。武蔵国府でも今の現代人と同じように、生きていくためには水が欠かせない存在でした。開発というテーマで見れば、その街並みを維持していたのは、大型の共同井戸です。現在の大國魂神社境内に役所の中核があったと考えており、その付近にも湧水がありました。なぜ府中に国府が置かれたのかについて、こうした水と東山道武蔵路と呼んでいる官道、つまり水と道路の結節点という水陸交通の要衝だったからだと考えてきましたが、知花先生がそれを結論づけていただいたと感じました。

もう1点、私は多摩川流域を中心とした多摩地域の古代集落の遺跡を追いかけておりまして、多摩川流域の古代集落も、その分布を追っていくと、水系ごとに集落が営まれ、河川＝水とのつながりが欠かせないことが分かってきました。その分布のまとまりのエリアは、古代の郷の範囲に相当するのではないかと思います。古代の郷というのは、文献史学では領域はないと考えられていますが、ある程度のまとまりがあったからこそ郷の領域が決められたのではないかと考えております。

一つの例として、私が50年ほど住んでいる東京都町田市の場合も、同じように古代集落のまとまりが捉えられます。今でこそ東京都ですが、1300年ほど

第3回多摩川流域歴史シンポジウム 「多摩川史のまとめ」開催報告

2021年9月26日(日) 13:30~16:50

場 所：日野市東部会館内ホール

参加者：57名(WEB) 主催：多摩川流域懇談会

前の古代集落の分布からすると、実は町田市は東京都ではなくて、神奈川県の川崎市を中心とした古代の都筑郡という郡域に含まれるのではないかと考えています。町田の場合は、この集落の分布が境川という水系と丘陵の分水嶺、また河川沿いに展開した集落分布から考えられるということで、古代集落も河川とのつながりが深いことがわかります。この町田の領域がなぜ現代の東京都の領域になっていくのかということ、古代以降の中世、近世のどこかで大きな変化があったのではないかと思います。そういったところのお話も後ほど先生方からいただくとありがたいと思いました。

最後に、本日、立派な「多摩川歴史巡り」のリーフレットをつくっていただきまして、ありがとうございました。サブタイトルの「史跡を歩き未来へつなげる」という言葉も、非常に重要だと思っております。その一環として、「多摩川スタンプラリー」を今日から10月8日まで実施しています。ぜひ皆様、このスタンプラリーに参加していただき、多摩川流域の様々な史跡を実際に見て、触れて、体験していただきたいと思います。コロナ禍ですので、気をつけてご参加いただければと思います。以上です。

○神谷コーディネーター

ありがとうございます。

今、最後に地図のお話も出ましたが、小田先生、この歴史巡りについての評価はどうでしょうか。今後どう使うかなどお答えいただければと思います。

○小田パネリスト

欲しい人にはどんどん送るといふわけにはいかならないと思いますが、多摩川に面した両県の神奈川と東京都の各学校に配ってもらいたいです。多摩川の歴史について、昔、東急財団かなにかがやったものがあって、触れないくらい厚いやつがあるのですが、これ意外といいかもしれません。

○神谷コーディネーター

ありがとうございます。リーフレットをどう使っていくかということもこれからの課題なので、いろいろな御意見をいただいて、また考えていかなければいけないと思います。

では、次の橋場さんと望月さんお願いいたします。

○橋場パネリスト

公益法人多摩市文化振興財団の橋場と申します。本日はどうもありがとうございます。

以前、セミナーの第5回で「関戸合戦と関戸の地域性」というお話をさせていただきました。これは2007年度に当館で開催しました関戸合戦という展示を基にお話をさせていただいたのですが、こちらにいらっしゃる小野先生や、第6回でお話しされた岩橋先生などの御研究成果なども使わせていただきまして、関戸に伝わる中世の合戦伝承が、どのような歴史的事実と近世の地誌編纂が関わっているのかというお話をさせていただいたものです。

関戸には関戸合戦、分倍河原と関戸で行われた1333年の新田義貞の合戦伝承がありまして、その供養が現在も行われています。その供養がいつから始まったかとか、実際にその基になった1333年の合戦がなぜその場所で行われたか、その後も、しばしば関戸、分倍河原のあたりが合戦の場所になっているのでそれがなぜなのかという話を少しさせていただきました。既にいろいろ指摘されていますとおり、鎌倉街道と多摩川の交差点に当たる場所で、渡河点に当たる場所であって、政治的にも交通上も軍事上も重要な場所だったという話をさせていただきました。

この伝承や伝承地が残っているのは近世の地誌編纂の影響が非常に大きいということで、単に中世だけを見ていくのではなく、その後の近世の動向なども見ていくべきだという、特に岩橋先生などの御研究を基に御紹介させていただきました。

その補足としまして関戸に関所があったことなど

第3回多摩川流域歴史シンポジウム 「多摩川史のまとめ」開催報告

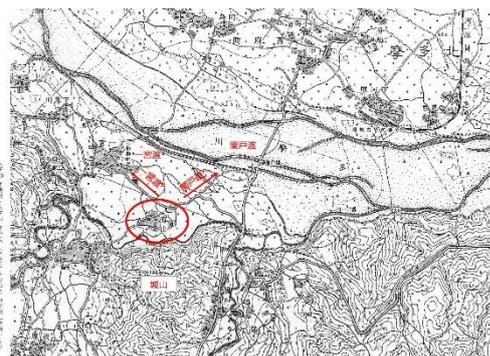
2021年9月26日(日) 13:30~16:50

場 所：日野市東部会館内ホール

参加者：57名(WEB) 主催：多摩川流域懇談会

が書かれた戦国時代の後の北条氏の時代の古文書がありますので、その古文書を伝来させてきた有山家の拠点がどこにあるかというお話を少しさせていただきたいと思っています。

大正10年測図・大正14年作成の地図ですが、「有山」と書かれている部分が有山集落と呼ばれている場所です。現在の聖蹟桜ヶ丘駅のすぐ近くの東寺方の1丁目なのですが、ここに有山屋敷があったと言われています。関戸合戦の伝承があるところはこちらの街道沿いですが、この裏山一帯が城山と呼ばれており、新田義貞がこの山の上で着到をつけたなどの伝承もあります。多摩川の関戸の渡しにつながる道と、一ノ宮の渡しにつながる道のちょうど交差点に有山集落があります。



多摩川流域懇談会補足
地図上に見える「有山」集落

この有山集落の検討をした結果、大栗川という多摩川の支流に岩堰という堰を設けて、ここから用水を引いてきて有山集落に流していました。この用水が江戸時代初期の元禄年間の頃の絵図に既に見えているので、江戸時代初期には開削されていたと考えられています。この有山集落の中の田んぼは、「有山田」という名前がつけられた田んぼが多いことから、有山が開発した場所だろうということまでは検討をしました。ただ、この有山集落がいつつくられたか、どのくらいまで遡れるかは、まだ検討が進んでいません。

今日のお話のように地形に注目しますと、小野神社のある一ノ宮の集落と有山のある有山集落はそれぞれ微高地になっていまして、昔から集落があるところだったという可能性があります。さらに、有山

の隣に細い水路みたいなものがあるのですが、これは古茂川と呼ばれていて、これがさらに古い用水である可能性があります。まだ検討途中の部分が多いですが、これからこういう集落や屋敷跡のことを検討していきたいと思っています。その中で用水というのは非常に重要だと考えております。

○望月パネリスト

続きまして、神奈川県立歴史博物館の望月と申します。本日はよろしくお願ひいたします。

私は、このセミナーは3年ほど前の第7回に多摩川下流域の中・近世史ということでお話をさせていただきました。今日は開発と文化ということですので、そのあたりを絡めて話を振り返りつつ、最近考えていることも併せてお話しできればと思っています。

多摩川のどこから下流域とするかということで、それぞれの方々によって下流域の出発地点は異なっていますが、基本的には、台地、丘陵を抜けて沖積低地に入ったところから下流域と呼んでいいのかと思っています。先ほど知花先生からも詳しく礫の話や砂利の話がありましたが、いずれにしても上流から多くの土砂が運ばれてきており、その中には有機質もたくさん含まれているということで、沖積低地には肥沃な土地が広がっていたのではないかと考えております。

その上で、下流域における開発ということで見ると、中世資料は数少なく非常に限られています。唯一残っている荘園資料があります。それが稲毛荘という荘園です。承安元年(1171年)にその荘園を土地調査した「検地目録」という資料が残っています。それによると、当時の荘園内の田の面積は263町歩ほどあり、そのうち耕作している土地が262町歩と、ほぼ99.数%耕作地であったことがわかります。当時の荘園を考えてみると、大体6割程度が耕作地で、ほかは荒れた土地ということが一般的ですが、その中でほぼ全面積が耕作地になっているということは、いかにこのあたりが肥沃であったのかを

第3回多摩川流域歴史シンポジウム 「多摩川史のまとめ」開催報告

2021年9月26日(日) 13:30~16:50

場 所：日野市東部会館内ホール

参加者：57名(WEB) 主催：多摩川流域懇談会

裏づけると思います。

併せて、この承安元年(1171年)以前、平治元年(1159年)に土地調査を行っています。そのときの田の面積が約206町歩です。十数年ほどで60町歩ばかりが開発されているということで、この時期非常に活発に開発がされたということが言えるかと思えます。地域的には、現在の川崎市の中原区にあたります。資料には、稲毛郷、小田中郷、井田郷という地名が記されており、今でも中原区に井田や上小田中、下小田中という町名があることから、この周辺に展開された荘園だと考えられています。

次に近世初頭の話になりますが、二ヶ領用水が川崎市域を流れております。慶長2年(1597年)に小泉次大夫によって工事が始まり、約14年間かけて慶長16年(1611年)に完成した灌漑用水です。これにより、江戸後期には1,000町歩ばかりの田に水が行き渡りました。この用水は、低地を流れているので流路にあまり大きな勾配がありません。では14年間でいかに開削工事を進めたのか、1つは知花先生の地図にもあったように、多摩川はかなり蛇行していました。氾濫で流れが変わると、その後に水が全く流れなくなるのではなく川の痕跡は残ると思います。小泉次大夫は、そうした痕跡をうまく利用しながら開削の工事を進めたのではないかと考えられます。当時の測量では、わずかな勾配を測るというのはかなり厳しいと思うので、そうした自然地形をうまく利用して開発を進めていったのではないかと考えています。

ですから、そういった意味で多摩川は洪水によって流域住民に大きな被害が出ますが、逆にその流路を使い、用水路として利用していたのだと思います。

さて、これまでは街道や渡河といった形で、どうしても川を横で考えてしまうことが多いですが、多摩川の水運という縦の交通についても考えなければいけないと思います。府中あたりでも常滑の大甕が出土していたり、青梅でも荒川上流で取れる緑泥片岩で作られた板碑が多く見つかったりします。

それらを陸路で運ぶことは不可能ですので、水運という形で運ばれました。いかに多摩川の水運が発達していたかということが、文化を運ぶという点で大きな意味をなしてくるのではないかと考えております。ただ、水運の資料は非常に少なく、特に多摩川では少ないので、遺物などから何か考えられないかと考えているところです。以上です。よろしくお願いいたします。

○神谷コーディネーター

ありがとうございます。

今、橋場さん、望月さんからお話しいただいて、お二人のお話は、この「多摩川史跡マップ」の中で「多摩川を歩く」関戸編と川崎編ということで囲みがあります。なかなかうまくできなかった面もあると思いますが、関戸編について、補足説明したいところはありますか。

○橋場パネリスト

マップでは霞ノ関南木戸柵跡と関戸観音寺を挙げていますが、⑩南木戸柵跡は菊池山哉が昭和34年(1959年)の調査で柱穴を見つけたことから、関所の柵跡と推測したものです。菊池山哉の書籍を見ると、関戸観音寺のほうにも北の木戸柵跡と出ているので、観音寺も関所の一部として菊池山哉は考えているのかと思われます。

ただ、これを鎌倉時代の関所の木戸柵跡として本当にいかどうかというのはまだ議論の余地があります。柱穴が出たというのは確かですが、その年代比定だとか、実際にそれが鎌倉時代の関所の柵の跡だったのかということについてはまだ議論があると思いますので、今後の検証で明らかになっていかと考えています。

このような細かいことは地図のほうには反映できないので、後ろの年表のところに「諸説あります」と書いていただきました。まだまだこれから検討により分かっていくと思っておりますので、「諸説あ

第3回多摩川流域歴史シンポジウム 「多摩川史のまとめ」開催報告

2021年9月26日(日) 13:30~16:50

場 所：日野市東部会館内ホール

参加者：57名(WEB) 主催：多摩川流域懇談会

ります」と書いていただいたことはありがたいと思っています。

○神谷コーディネーター

ありがとうございます。

QRコードで「多摩川を歩く」に入れるようになっていて、その説明についてもバージョンアップしていこうという話もしていますので、様々な御意見もいただきながら改善していきたいと思います。

望月さんも川崎編について御意見いただけますか。

○望月パネリスト

川崎も多摩川に沿って縦に長い市域になっていますので、網羅的に扱うことは非常に難しいのかと思っています。マップでは、川崎宿周辺として六郷の渡しや田中本陣、二ヶ領用水関係がありますが、二ヶ領用水は取水堰が2か所ありますので、できれば中野島のほうもあってよかったのかと感じています。

流域にはそれぞれ様々な史跡等もありますので、ぜひこのマップを一つの手がかりにしながら御自分で歩き、新しい発見をしていただければと思います。

○神谷コーディネーター

ありがとうございます。

二ヶ領用水や六郷用水も何とか地図の中に入れ込みましたが、どうしても多摩川全域の地図の中で表現するということが難しい面はあったかと思っています。またこの詳細が見られるよう補足していけたらと思います。ありがとうございます。

それでは、引き続き、眞下さんと小野さんにお問い合わせいたします。

○眞下パネリスト

江戸東京博物館の眞下と申します。2019年10月に、第8回のセミナーでお話をさせていただきました。タイトルとしては「近世多摩川の分水ー水の利用を

考えるー」ということで、それまでのお話は多摩川の本流について先生方にさせていただいたと思いますが、私は分水を取り上げさせていただきました。

江戸時代は、中世までと少し異なり、江戸にまず首都が置かれて、人口がかなり増えてきたこと、それから人の移動が活発になってきたことがあります。その流通と移動を満たすために、河川が非常に有効利用されたことが近世の特徴かと思っています。

また、もう一つの特徴として、多摩川の物資の移動があります。望月先生からもお話がありましたが、緑泥片岩の話や常滑焼きの話もありますが、物資以外に飲料水として多摩川が利用されるようになったことが非常に大きい問題かと思っています。慶長年間の二ヶ領用水、六郷用水の分水から始まり、初期段階の分水は、基本的には灌漑用水として田畑を生かすために多摩川の水が使われました。それが承応年間ということで1650年代になると、上流の羽村で玉川上水が多摩川から分水され、江戸の市民の飲み水となりました。多摩川が灌漑だけではなく飲用としても活用されるようになったわけです。

知花先生のお話にもありましたが、なぜそんなに遠いところから水を持ってこなければいけなかったのかという疑問が挙げられます。それがまさに勾配からの観点で、遠くへ水を運ぶためには勾配をはじめとしたさまざまな地形条件について考えなければなりません。今後、多摩川や玉川上水を考えるために、こういった地形の問題や科学的な分野、データの問題などを集めていかなければいけないと思っています。

あと、多摩川は線としてではなく、面として考えなければならないという点です。今の玉川上水のお話にもありますが、多摩川の水は玉川上水に入って、その玉川上水の水が30以上の分水を生み出し、さらには神田上水にも助水として使われております。つまり、大きさに言えば、多摩川の水は武蔵国の南半分を流れていたと言えます。

そう考えますと、もっと多摩川を広く面で捉えて、

第3回多摩川流域歴史シンポジウム 「多摩川史のまとめ」開催報告

2021年9月26日(日) 13:30~16:50

場 所：日野市東部会館内ホール

参加者：57名(WEB) 主催：多摩川流域懇談会

その多摩川の水の役割をさらに検討していかなければいけないと思っています。人が住んで、それから生活が安定し、次に文化というものがやってきて、人の心がもっと潤っていくというようにつながっていくと思います。そういうところを古代から中世、近世、近現代まで含めて広い視野で検討していくと、多摩川についての意識が広がっていくと思います。

マップにつきましては、非常にいいものをつくっていただいたと思います。史跡にあるように、近世から現代というのは連続していると思います。個別にこの部分が近世だけだということではなく、近世で利用されていたものが、近代、現代になっても使われています。羽村の投渡堰はその典型的なもので、近世と構造が変わらないまま今でも使われていますので、そういった連続性の問題も多摩川を考える上で必要になってくると思います。

○小野パネリスト

恐れ入ります、小野と申します。

多摩川という川の名前は、「万葉集」で歌われている非常に古いものです。それでは、なぜ「タマガワ」と呼ぶのかといった場合は、奈良時代の「万葉集」や「風土記」の中で、水辺の石、海辺の石を玉に例える表現というのが非常に多いです。そのことから多摩川の名前も、玉のように美しい河原石ということで「タマガワ」と名づけられたと考えました。そのことは、石材が非常に豊富な川だったということと非常に特異な石の川ということからも理解できるのかと思っています。

次には、地名が先か川の名前が先かということがあります。多摩川が流れているところは多摩地域ですが、多摩を流れていたから多摩川と呼ぶのか、多摩川が流れていたから多摩という地名になったのかという問題です。これにつきましては、多摩川という名前が自然発生しやすい川の名前で、全国的にも大変多いことから考えても、川の名前が先かと思えます。律令国家ができたときに郡が編成されていま

す。郡は当初、評と呼んでいましたが、そのときに多摩川の中流域、上流域を含んだ村々を編成して、多摩評、多摩郡がつくられたということが考えられます。要するに、多摩という地域の文化は多摩川から来ていると思います。

「タマガワ」の漢字表記は時代によって変わっていきます。江戸時代には文芸表現の中で、「玉川」が非常に多く使われます。今は「多摩川」が定着していますが、時々「玉川」が見え隠れてしているのは多摩川の文化の問題だと考えました。

リーフレットの感想ですが、これは歴史巡りを目的としたマップですが、最大の特色は自然地形的な流域を明瞭に示したところにあるのではないかと思います。多摩川もそうですが、大きな川は県境、市境になっています。しかし、その地域の文化を考える場合には、右岸、左岸共に流域として考えていくべきだということをこのマップは教えてくれていると思います。

ちなみに、「万葉集」に歌われているこの辺の地名は、武蔵野と多摩川と多摩の横山の3つです。この3つ以外は詠まれていません。この3つが詠まれているのは偶然ではないと思います。知花先生のおっしゃる流域景観です。武蔵国府が置かれたあたりから見た自然地形的な流域景観が、明瞭に武蔵野、多摩川、多摩の横山、つまり多摩丘陵となっています。こういったことも、このマップを見ながら理解できると思います。以上です。

○神谷コーディネーター

ありがとうございます。

とりあえず一回りしましたので、Q&Aで1つ御紹介したいと思います。知花先生に関係するお話がずっと出てきたと思いますが、暮らしについて1つ質問がきています。「川の地形によって人と川の関わる場所が決まり、川と関わったお年寄りの多い地域では、今でも川を守る地域活動が活発な傾向にある。そういうお話と理解してよろしいでしょうか。」こ

第3回多摩川流域歴史シンポジウム 「多摩川史のまとめ」開催報告

2021年9月26日(日) 13:30~16:50

場 所：日野市東部会館内ホール

参加者：57名(WEB) 主催：多摩川流域懇談会

れにお答えいただいた上で、皆様の知花先生に関する御意見についてもお答えいただければと思います。

○知花コメンテーター

ありがとうございます。御質問もありがとうございます。まず、御質問にお答えしてから皆様のお話に関連するところをお話ししたいと思います。質問いただいたとおりです。地形がまずあって、その地形が人の暮らせる場所を規定しますし、水の動きも規定します。やはり地形があって、その上に水の流れがあって、それを利用する人の暮らしがあるというのがベースになるので、川の地形によって人と川の関わる場所が決まるのですから、これはそのとおりです。

次のポイントも大事で、「川と関わったお年寄りが多い地域では、今でも川を守る地域活動が活発な傾向にあるのですか」についてですが、これもその通りです。昔、川で遊んだ人が多いところでは活動が続いているし、農業用取水堰がある場所には、今まさに川に関わっている人がいるので、今でも一生懸命活動しています。

大事なのは、今後この活動をどうつないでいくかということです。それがうまく次世代に継がれていく場合とそうでない場合があるんです。舟運が栄えて川と関わりの深い集落ができ、年配の方がよく川で遊んだという話があって、それを聞いていた今の40代の世代やもっと若い20代の世代がいます。特にそうした地域で、次世代に川の意味をどうつないでいくかというところがまさに今後問われるところです。人と川との関わりが深い地点を中心に、うまく継がれている地域もあるので、それをもう少し解明して、様々な地域で人と川の関わりを強くしていけたらと研究をしているところです。

先生方も、これまでの振り返りありがとうございました。私も発表資料を読ませていただいて、このマップも拝見して、改めて今日のお話を聞くと、セミナーに出ておきたかったという思いが強くなりま

した。結局、流域があって、そこで水のつながりができるのです。それが人と人のつながりにもなりますし、石材も運ばれますし、古くは普通に石が流れてもきました。材木なども流しますので、流域を捉えて、その上で地形や水系を捉えて、そこから歴史を分析していくことの意義と面白さを改めて皆さんのお話を伺いながら痛感した次第です。

ところで、関戸合戦の話は今日全く触れませんでした。橋場さんのお話で、あの地域がいかに広い河原が広がっていたのか、なぜあそこなのかというのが、地形を見てよく分かりました。

この場所に関して、惣画図をずっと眺めていると大栗川が大きく描かれていて、一方で、実際に今の状況を見るとそんなに有名な支流ではないです。そういうことを考えると、昔の絵は面白いと思います。実際のスケールでは全然描かれておらず、様々な思いが込められているような気がします。そういう意味では、大栗川はかなり大事な川だったのかと感じますが、その辺いかがですか。

○橋場パネリスト

大栗川が大きく描かれていたというのは、恐らく作者の相沢伴主が多摩の関戸村の出身で、大栗川などについても自分で調べて描いているので、恐らく通常以上に大栗川がデフォルメされたのだと思います。作者の問題かと考えられます。

○神谷コーディネーター

ありがとうございます。

最後に、眞下さんから望月さん、江口さんと回って、全体のコーディネートしていただいた小野さんと、このマップのきっかけをつくっていただいた小田先生と回っていきたいと思います。眞下さん、補足や知花先生への御質問でも構いませんのでよろしくお願いいたします。

○眞下パネリスト

第3回多摩川流域歴史シンポジウム 「多摩川史のまとめ」開催報告

2021年9月26日(日) 13:30~16:50

場 所：日野市東部会館内ホール

参加者：57名(WEB) 主催：多摩川流域懇談会

玉川上水は開削時の文献がほとんど残っていないということで、なぜ羽村なのかということについて、選ばれた理由は古文書などからは明確に知ることができません。しかし、こういうところに堰を築いたり、重要だろうと思われるポイントはとてもよく分かっています。ただ、どのように当時の人々が地形を読み取れたのかというのはとても不思議です。記録的にここから引きましたとかこういうやり方をしましたということがあればよいのですが、今後、掘削などのことを考えるにあたって、当時の人々が多摩川を見てどのように地形的に捉えていたのかを考えていかなければいけないと思ったのですが、知花先生から、地形の把握方法についてどのような意識をお持ちかお伺いしたいと思います。

○知花コメンテーター

ありがとうございます。我々には地図があります。武蔵野台地はもともと多摩川の扇状地が隆起したもので、今も等高線を真っ直ぐに引くと同心円上になります。しかし、真っ直ぐ玉川上水を通すと素直に流れるという話は地形図を持っている人間の感覚です。当時、どういう空間認識をしていたのかという話はとても興味があります。まるでドローンやスカイツリーから眺めたかのような絵図が昔に描かれていて、どれぐらいの空間スケールなら俯瞰的に人間が想像できたかというのは、私も興味を持っているところです。

もう一つ、なぜできたのかという理由について考えると、昔川が流れた形跡でもあったのかという気もしますが、全く想像が付きません。

実際地べたを歩きながら同定できるのか、地形と今の川の姿を見ながら同時に思い馳せて行くことは面白い作業だと思うので、もう少し研究したいと思っています。ありがとうございます。

○真下パネリスト

ありがとうございました。俯瞰的な物の見方とし

ては北斎や広重などでもそうですが、錦絵などによく鷹の目線からまちを見ろというのがあって、そういう認識を持っていた人がいたと思います。それがもう少し具体的に解明できると、そういう俯瞰的な感覚を持てるような人がいたのかと想像ができますが、それについても深めていければいけないと思います。

○知花コメンテーター

追える限界というような空間スケールがある気がします。ありがとうございます。

○神谷コーディネーター

それでは、望月さん、一言お願いいたします。

○望月パネリスト

知花先生から大変興味深い話がたくさん聞けて、非常に勉強になりました。特にセグメントの1、2、3という形で分けた街道と渡しの部分は非常に面白いと思いました。

例えば調布堰あたりですと、多摩川の汽水域の限界ということも何か関係してくるのかと思いました。また、関戸は重要な場所だと考えています。水運の部分でも、関戸地域は材木を流してくるところの集積でもあったり、下流から船で運ぶ一つの集積地でもあったり、様々な意味で交通の要衝、渡河地点ということで関戸宿ができたのだと思います。

先ほど先生が地図を見て、このあたりは河原が広いという話を聞いて、そうすると河岸が発生して、そこで物資が集積することも十分考えられるということで、今後いろいろと考えてみる手がかりになると思いました。

そのような意味で、勾配変化点と歴史的な事象とをうまく結びつけていくと、多摩川の立体的な全体像が見えてくるような気がしました。改めまして今日は大変貴重なお話をありがとうございました。

第3回多摩川流域歴史シンポジウム 「多摩川史のまとめ」開催報告

2021年9月26日(日) 13:30~16:50

場 所：日野市東部会館内ホール

参加者：57名(WEB) 主催：多摩川流域懇談会

○神谷コーディネーター

ありがとうございます。

関戸が脚光浴びていますが、江口さん、一言お願いいたします。

○江口パネリスト

まず、知花先生、今日はありがとうございました。私は小学校以来教わってきた摩耗説しか知らず、府中あたりで摩耗した河原石は、上流から運ばれてくる間に削れるのだと市民の皆様ともお話をしていたことがあったので、不勉強を痛感しました。

そうすると、例えば今日、このリーフレットの⑨、府中市にある武蔵府中熊野神社古墳という上円下方墳、国内でも発掘調査で確実な例は10例に満たない珍しい古墳を取り上げていただいたのですが、そちらに積み石(葺石)で葺かれている石が多摩川の河原石と考えていまして、直径が10センチぐらいで長さが30センチぐらいの磨滅した河原石なのです。それが府中市周辺で取れると信じていたのですが、知花先生のお話だと小さい河原石しかないということだったので、お伺いしたいと思いました。

古墳時代に、長さ30センチぐらいで直径10センチぐらいの角が丸くなったものを、私たちは多摩川の府中市周辺で取れる河原石だと信じて疑わなかったんですが、別に取れないわけではないということまで考えてよろしいでしょうか。今日のお話だと、小さい河原石ばかりだということですが、その点だけ、武蔵府中熊野神社古墳に関わってお伺いしたいと思いました。

○知花コメンテーター

ありがとうございます。今は砂利ばかりですが、年配の漁協さんや昔釣りをした人が、大きな石がなくなったというので、大きな石があったのはそこまで昔ではありません。先ほど古い写真を見せましたが、多摩大橋なので、昭島のあたりで少なくとも30センチ近い石があったはず。なので、古墳時代は

あったはず。では、どこまであったかという話になると、やはりどれだけ下流まで行っても、関戸か、その下流の是政のあたりです。あそこから勾配が落ちるので、分級説からいうと、その辺までかと思えます。

今でもところどころにはあるので、どこかにはあったはず。なので、古墳をつくっていたときは、恐らくそんな遠くから運んでこなくても、30センチの石は取れたのではないかという気はしています。ただ、今はないので想像しづらいです。

もう一つ、先ほどの摩耗説と分級説について、摩耗説を否定するものではありません。石は当然丸くなっていきますし、石が割れているところも実際に見られますから摩耗説はありますが、バランスが重要になります。まず、地質によって違うという感覚を持っていて、先ほどから緑色片岩の話も出ていますが、ああいう石ですとやはり摩耗のほうに卓越している気はします。しかし多摩川は、勾配と石の大きさを考えると、やはり分級説抜きには難しいという気もしています。ありがとうございます。

○江口パネリスト

ありがとうございます。では、最後に、今日知花先生におっしゃっていただいた国府が置かれた理由について、多摩川が崖にぶつかって大丸用水堰で集中するという、ホットスポットは現在の府中街道あたりが自然堤防と考えていたので、そこがぽっかり合うとおっしゃっていただいたので、安定的な水田経営を営める立地ということがよく分かりました。ありがとうございました。

あと、今日は古代の武蔵国府と集落について述べていますが、先ほど望月先生がおっしゃったように、多摩川下流の品川湊で発見されている常滑焼きの大甕と全く同じタイプのもので府中市でも発掘されていることは、下流から遡って府中周辺まで来るということも十分考えられますし、逆に上流からということでは、現在の八王子市域の南多摩窯跡群の須恵

第3回多摩川流域歴史シンポジウム 「多摩川史のまとめ」開催報告

2021年9月26日(日) 13:30~16:50

場 所：日野市東部会館内ホール

参加者：57名(WEB) 主催：多摩川流域懇談会

器が平安時代になると、大量に府中に入ってきます。上流からの須恵器も、舟運で府中に運ばれてくると思いますので、そういう縦のつながりが時代を超えて、考えられるのかなと思いました。ありがとうございました。以上です。

○知花コメンテーター

ありがとうございます。今のところは大事で、私も資料を見た限りですが、舟運は大事で、荒川や江戸川だと舟運と河岸というので説明つきます。下流から上がってきたときの陸との接点が浮かんできます。

なので、今は上から出てきた土砂がどこで変化を持つかという観点で見っていますが、下から船が上がってきたときにどこまで上られるかを考えるには、汽水域がポイントとなりそうです。感潮域と言う場合もあります。海水と淡水が混ざるのが汽水域で、干満の影響を受けるのが感潮域という定義を習いました。

しかし結局、上から来るものといえば、水のほかに材木や石材の輸送もありますので、セグメント境界はそれらの動きともやはり合致してきます。上流からと下流からとで挟んで考えていったとき、その交点となるのが勾配変化点で、様々な人間活動を捉える上でも大事かと思いました。感想です。ありがとうございます。

○神谷コーディネーター

ありがとうございます。

小田先生、小野さんと回って終えたいと思います。

では、小田さん、お願いいたします。

○小田パネリスト

多摩川では、30センチぐらいの石が江戸時代にはあまり見られません。旧石器時代には、拳ぐらいの石が一番大きく、あまり大きい石を使わないのです。あとは小さな石を石器の材料に、チャートとか砂岩

を使います。メノウを使うこともあります。恐らく山梨から取ってきたものです。大きい30センチぐらいの石を使うようになったのは縄文時代です。特に縄文時代の中期、つまり5000年前です。縄文人は大きい30センチほどの石を大量に多摩川から使っています。それで石のお皿をつくったり、石の板の上で様々な穀物を割ったりつぶしたりする道具に利用していました。

あと、調布の深大寺の裏山に、深大寺裏山遺跡があり、縄文中期の打製石器群の製作地で石の斧をつくっていました。30センチ以上の大きい石を割って打製の石の斧にします。深大寺の裏山には、リヤカーで運んだぐらい、石の斧が山のように畑に落ちていました。小金井の貫井南遺跡で発掘したときに、出てきたものを全部計測しました。それを全部大きな石に復元した形で、30センチほどの石から何個ほどの打製石器がつくられるかを「ドルメン」という雑誌に発表しています。縄文人によって調布とか府中あたりの石はほとんど取り尽くしてしまうのではないのでしょうか。

その後、弥生時代になると、その石は不要になります。水田耕作ですから、むしろ大田区とかあの辺の低湿地に水田をたくさんつくり、集落は高台につくっています。このように弥生時代と縄文時代、旧石器時代で石の使い方が違いますので、恐らく大きい石は縄文人が取り尽くしたということで、なかったのではないのでしょうか。ということをお話で思いつきました。以上です。

○神谷コーディネーター

ありがとうございます。

ここで、リモート参加の皆様で質問がありましたので小野さんの話を少し置いて、Q&Aをやります。

「多摩川の流域の地形や歴史、治水、地形分類図から、ある程度自然摂理から法則に従って人の営みがなされてきたということをお学びました。質問です。古い図面からの学びという点ではいかがでしょう

第3回多摩川流域歴史シンポジウム 「多摩川史のまとめ」開催報告

2021年9月26日(日) 13:30~16:50

場 所：日野市東部会館内ホール

参加者：57名(WEB) 主催：多摩川流域懇談会

か。」これは知花先生だけではないかもしれませんが、いかがでしょうか。

○知花パネリスト

御質問ありがとうございました。また、感想もありがとうございます。

先ほど大栗川の質問をしましたが、ああいう話が意外と大事だと思っていて、本来地図というのは客観的に描かれているべきものです。今の我々の感覚からいうと、緯度経度がきちんと合っていて、正確な標高が描かれている地図がいい地図です。ただ、ずっと遡っていくと、古くは行基図みたいなものがありますが、あれは随分ひずんでいるし日本列島の形じゃないのです。しかし、伊能図があればあれは要らないのかという、あれはあれで当時どこが大事だったかを捉える上では大事です。結局古い図面は、今の地図の感覚でいう精度に関しては落ちますが、逆に何に焦点を当てていたのかがよく分かるので、古い図面と古い考古史料、今の正確な地図という、この3点セットを照らし合わせて初めて見えることも多いと思います。

関連するかは分かりませんが、今、我々は風景を写真で把握しますが、写真の少し前だと風俗画報の絵で把握していました。あれも結局絵師の方がその地域に入って聞いた話で描いているので、ある意味今よりもショッキングな映像になります。なので、客観的に捉えられる話と、そのときに起こっていた人間の事象が混ざって描かれているので大事かと考えています。ありがとうございます。

○神谷コーディネーター

ありがとうございます。

この辺を素材にして話を進めると、テーマである開発と文化にも近づけると思うのですが、小野さん、まずは一巡ということで一言お願いします。

○小野パネリスト

まず、知花先生のセグメント境界論は衝撃的で、境界のところに街道や渡しがつくられていたというお話でしたが、例えば端から道を造って行って川に着いたときに、道というのは大きなデザインで行われているものなので、右に振れようか左に振れようかという問題にとどまらないと思います。例えば関東平野全体あるいは東日本全体でデザインしていく中で律令国家の官道をつくる場合にも、川を起点に道をデザインしていることになってしまいます。律令国家の列島デザインのときに大きなポイントになるところが河川で、その次に役所を基にして道をデザインしているということですから、今日先生が提示された問題というのは大きく波及するのではないかと思います。とりあえず以上です。

○知花コメンテーター

ありがとうございます。どこまで展開、主張しているか分かりませんが、先ほどのお話と一緒に、古代人の空間認識のスケールです。確かに街道筋が全部川の状況で決まっているとは思えないので、もう少し広域の状況で決まっているはず。そういった中で、ここは川が渡りにくい、あるいは川は変動が大きいからもう少し上流にしようみたいなことはあったと思います。ですが、それでできる調整は限られているので、広域の何かがないと街道の通し方は決まらないはず。

ただ、川及び川の周辺の人の暮らしで、既に人の暮らしや何らかの動線みたいな小さい道はできていた気もします。それは国府と畿内を結ぶというような大きな話とはまた別に。なので、そういうミクロな計画とマクロな計画がどこかでぶつかって今の姿があるのかと思っていますが、そこは私もまだこのセグメント境界論を始めたところなので、どういうふうに広域とつながるのかは今後も研究していきたいです。ありがとうございます。

あと、コメントというかお礼を言いそびれました

第3回多摩川流域歴史シンポジウム 「多摩川史のまとめ」開催報告

2021年9月26日(日) 13:30~16:50

場 所：日野市東部会館内ホール

参加者：57名(WEB) 主催：多摩川流域懇談会

が、小田さんのお話、ありがとうございました。人間の影響はいつまで遡るのかという話があって、我々は戦後ぐらいをずっと追っていますが、明治期も結構川が荒らされていたということもあり、そこから先はあまり人間の影響は大きくないと軽視していた感じがあります。

ですけど、古代に30センチ大の石はあったとは思いますが、今はそう簡単には流れて来ません。実験で羽村堰の下に大きな石を置いておいても、流れていく過程で砂利の中に埋まっちゃうので、下までうまく行かなかったのです。なので、結構な量がないとあんまりまで行かないですし、しかも相当な洪水がなければ、そんなにたくさん行きません。しかし、万年スケールだとあり得たと思います。ただ、それをそうやって縄文時代から取り尽くすという行為は現在まで残る影響としてはあるかもしれないと思った次第です。どうも貴重な御意見ありがとうございました。

○神谷コーディネーター

ありがとうございます。

この辺の話でつないでいていただいていた方がいいかと思います。小田さん、いかがでしょうか。

○小田パネリスト

いわゆる旧石器や縄文時代の狩猟、採集を主にした生活のときには、あまり多摩川などの大きい本流を人間は利用しません。飲料水のある湧水のところで生活するのが中心で、むしろ多摩川の低地のところは、動物とかそういうものがたくさん通ったり集まったりしてくるところで、高いところから見て狩猟するということが中心です。弥生時代になって初めて農業という、いわゆる水田稲作になってから、多摩川の利用というのは大きく変わってくると思います。特に田園調布には邪馬台国ぐらいの大きな弥生の集落があります。お墓もあって、田園調布南高校の敷地からはすばらしい首飾りをやった女王様が

発掘されています。

多摩川台古墳という古墳もあの辺にあります。それはみんな、関西から黒潮を通過してずっと東京湾に上がってきますが、多摩川の入り口で一つの集落というか基地をつくります。いわゆる関西の基地です。そして、今度は荒川上流に行って行田のほうに2か所あります。武蔵野台地で言えば、赤羽のところに1つあります。なので、武蔵野台地は荒川に面した赤羽に1か所、多摩川出口の田園調布あたりに1か所、すばらしい弥生の大国ができています。

古墳時代になると、どんどん関西から人間が進出していきますので、不思議なことに、関西の古墳じゃない大陸からの古墳の影響の人たちがたくさんお墓をつくるのです。狛江の亀塚からは、朝鮮式の形をしたすばらしい玉の数珠が出てきており、今も文化財としてあります。先ほどの多摩の落川の大栗川にも、特殊な古墳があります。あと、三鷹の天文台の中にもあります。そうすると、弥生時代から様々な人たちが多摩川を利用して上がってくるということになります。なので、狩猟・採集の時代と農耕の始まった時代を一つの大きな区切りとして多摩川の利用を考えてみたらどうでしょうか。

○神谷コーディネーター

ありがとうございます。

チャットで石の話が1つ入ってきています。「多摩川の玉石は、石垣などたくさん使ってきたのではないですか。今はコンクリートですが、多摩川採取が禁止される前は、府中、国分寺近隣の崖の石垣はみな河原石でした。」という話です。

○知花コメントーター

ありがとうございます。旧石器時代に使った話は今日初めて勉強しましたが、30センチ大の大きな石がかつてはあって、それはかみ合わせが外れたから流れていったという説も確かにありますが、使ったという話もたくさん出てきます。おっしゃるとおり

第3回多摩川流域歴史シンポジウム 「多摩川史のまとめ」開催報告

2021年9月26日(日) 13:30~16:50

場 所：日野市東部会館内ホール

参加者：57名(WEB) 主催：多摩川流域懇談会

だと思います。

例えば砂利採取でも、いいサイズの骨材がなくなったので、砕石機に放り込んで割ったという記述も見たことがあります。

これは別の川でしたが、「最近、この川どうですか」と言ったら、年配の方が、「昔、大きな石がたくさんあったのが、最近全然ない」とおっしゃったのです。「なぜそんなになくなったのですか」と聞くと、その人は「みんな持って帰ったから」と言っていました。「漬け物石にも使えるし、石垣にも使えるからみんな持って帰った。だからなくなったのだ」とおっしゃっていました。

あまりこうした影響は考えずに川の中の地形を説くことが多いですが、やはり人の影響は無視してはいけませんね。なのでおっしゃるとおり、基本的には昭和30年、40年になっても、かなり持ち出されたのだと思います。

○神谷コーディネーター

ありがとうございます。

玉石については小野さんも言及されていますが、多摩川の玉石は切っても切れない関係にあると思います。そのあたりについて、玉石という見方で見ると、なぜ多摩川にたくさん玉石があったんだろうかというのも疑問ですが、その辺はいかがでしょうか。

○知花コメントーター

ありがとうございます。難しい質問です。そういう意味でいうと、さっき私、地質の話をしました。どちらかというと花崗岩や火山岩のほうが大きな石がたくさん出ます。逆にある程度の大きさから砂までのバランスが一番いいのは、古い堆積岩系のところだという気はして、花崗岩だと大きな石と砂になります。火山は、大きな石で安定すると言いましたが、山本晃一先生とお話ししていたときに、風化の不連続性の話は分かるが火山だけ自分の感覚と違うとおっしゃったのです。山本先生は、火山は大

きな石もあるし火山灰もあるからセグメントに分けにくいとおっしゃるのです。確かに火山灰や火山砕屑物の影響などいろいろ考えなければならないと思った次第です。

一方の古い堆積岩に関しては、また少し違い、連続的に出ます。風化の不連続性からいうとすごく大きな石は出にくいですが、30センチほどから出始めます。ほかの川だと20センチ大の石はたくさんあります。20センチ大からずっと砂利、砂までありますが、その中で火山と違うのは、メリハリがあるというところ。連続的ではありますが、巨礫があるところと急勾配地点、セグメントはきれいにできるのです。さらに、扇状地とセグメント2-1、2-2というように、連続的だがスポットがちゃんと分かれていくという特徴が古い堆積岩の特徴かと思います。

古い堆積岩はジュラ紀あるいは白亜紀の付加体で、四万十帯もそうですが、太平洋岸沿いにずっと沿っており、基本的には糸魚川-静岡構造線、すなわち静岡より西のほうで顕著に見られます。東側はかつて海面下に沈んでいるので、若い地質年代のものも多いですし、火山も多くて見つけにくい。そういった中でフォッサマグナがあって、ちょうど関東山地のところだけ古い堆積岩が残っているので、関東地域にこうした川があったというのは、コンクリートの骨材を取る上で好都合だったということです。

そういうジュラ紀や白亜紀の付加体の礫河原はきれいです。日本の一級河川は一通りずっと車で巡回しました。最初、関東から西にいて、四国を回ってから中国地方に入って、九州北部に入りました。中国地方と九州北部は花崗岩ばかりでした。そうすると、大きな石と砂の川がずっと続いて、やや視察に疲れてきました。しかし、九州の中部から南部に入ってジュラ紀付加体に入ったとき、礫河原を見て懐かしさを感じました。ああこれが自分のなじみの石の川の風景だと感じたのを覚えています。

玉石というと大きな石だけに焦点が当てられがちですが、大きな石があればそれを中心にきれいな粒

第3回多摩川流域歴史シンポジウム 「多摩川史のまとめ」開催報告

2021年9月26日(日) 13:30~16:50

場 所：日野市東部会館内ホール

参加者：57名(WEB) 主催：多摩川流域懇談会

度分布があります。大きい石があって、その間に細かい石が詰まっています。これは先ほどの火山のメリハリのない粒度分布とは違います。様々なものがただ混ざっているだけではなく、大きい石がその周りに隙間を埋めるようにいくので、堆積岩の川は粒度分布の形を書くとすごくきれいになります。なので、大きな石もあるし砂利もあるしで、きれいな石の河原ができていたというのは、多分多摩川の特徴ではないかと見ています。火山岩、花崗岩の河原がきれいでないと言うと怒られますが、少し河原の形が崩れることもあります。

○神谷コーディネーター

ありがとうございます。結論としては、「玉川」でよいそうです。今日のパネルディスカッションのテーマに即して開発と文化ということで、最後に一回りして締められたらと思います。

それでは、橋場さんからどうぞお願いいたします。

○橋場パネリスト

知花先生の御講演の感想を申し上げたいと思います。勾配変化点についても興味深かったですが、砂利が現在のような形になったのが最近だというお話が、河床のところまで着目したことがなかった自分にとって、非常に面白かったと思います。多摩川と非常によく似た河床を持つ川というのはあるのでしょうか。多摩川がかなり変化しているというお話だったので、変化しない場合はどういう形だったのかを知りたいと思ひまして、もし多摩川によく似た川があれば教えていただきたいと思っております。

○知花コメンテーター

ありがとうございます。比較研究をすることが多いので、火山岩と堆積岩でこう違いますという比較はよくやりますが、類似の川で人間のインパクトのあるなし、強い弱いを比較しようとしても、比較対象を探すのが難しいことが多いのです。さっき言っ

たようにジュラ紀や白亜紀の付加体の川だと、西に行くと目立つのは、糸魚川ー静岡構造線のすぐ西なので、安倍川、大井川になります。ある意味似ていますが、山から出てくる土砂の量が全然違います。

そこから西に行くと、紀伊半島とか四国南部になりますが、今度は山になってしまうものの、四万十川と多摩川を比較すれば、石は多摩川に似ています。先ほど九州で懐かしいと言ったのは、番匠川という大分県の川で、河原としては似ていますが、川の規模が小さいです。このようになかなかありません。

なので、焦点を当てるポイントによって違います。地質的には確かに安倍川や大井川と多摩川は比較してもいいと言えます。あるいは流域規模で見ると、多摩川と栃木、茨城を流れる那珂川を比較することが多いですが、こちらは火山なので、今度は石の材料が全然違います。しかし、例えば台地と低地の使い方とか、そういったものでは比較できるので、何か焦点を決めてあげると比較はできますが、難しいのが現状です。

荒川や千曲川も、近いと言えば近いんですけども、周りに入ってくる丘陵地や形が違います。荒川と多摩川の比較をしても、いろいろ違います。なので、正直難しいです。また探しますが、ここだと言えないのが現状です。

○神谷コーディネーター

そうですね、武蔵野台地自体が、全国取り出ししてみてもかなり大規模な扇状地で、そこに人が大勢住んでいるので、多摩川は少し特殊な川なのではないかと思ひます。

今日のお話ですごく、納得したのは、眞下さんが武蔵の南半分を流れていたのが多摩川だとお話されたことです。やはり文化的に見ると、多摩川流域はそういう捉え方をしないといけない気がします。眞下さん、いかがでしょう。

第3回多摩川流域歴史シンポジウム 「多摩川史のまとめ」開催報告

2021年9月26日(日) 13:30~16:50

場 所：日野市東部会館内ホール

参加者：57名(WEB) 主催：多摩川流域懇談会

○眞下パネリスト

文化的なお話と多摩川流域の話というと、先ほどの川の問題で、もちろん飲料水としての問題はあると思いますが、やはり水辺空間をもう少し突き詰めていく必要があると思いました。例えば玉川上水と言えば、小金井桜が著名で、江戸時代後期には江戸から日帰りの旅ができるような観光地ではありましたが。当初はただ水が流れる空間が、桜が植えられ、そこにさまざまな人が集まって観光地になって、交流が生まれ、文化が育っていきます。

これは多摩川も同様だと思われます。初期の頃はどうしても灌漑とか飲料とか生きるためだけに水を使うことになりませんが、少しずつ変わってきて、近世の後期、それから近代、現代になるごとに多摩川の河川敷の扱いが変わってきて、いわゆる文化というのは少し違うかもしれませんが、川を生活のなかに取り入れていくことで、川と共に生きるという風潮ができあがってきて、時代を下ってくるごとに個人から集団へ、多様化するようになってきているのは、いい傾向ではないかと思っております。

先ほどのお話で、多摩川流域は非常に水辺空間を利用する活動がいまだに多く残っているというので、私も幾つかは知っていますが、流域全体に残っているとは思っていませんでしたので、多摩川として誇るべきことだと思います。そういうところをこれからも発展させて、単に水辺を利用するのではなく、多摩川の歴史や流通の問題とかの学びの中に入れていただけるといいのかなと思います。

○神谷コーディネーター

ありがとうございます。

知花先生のお話は縦断勾配の話で、私は建設なので慣れていますが、普通は平面的や水系と、あまり縦断で考えません。しかし、例えば多摩川の主流である大栗川、乞田川、浅川とかが集中している場所が府中なわけです。なので、恐らく縦断的にもそれは顕著に特徴が出ていると思います。国府の意味や

価値がなぜあそこなのかというあたりで、私は水との関係が大きいのではないかと思っていますが、今日の知花先生の話も含めていかがでしょうか。

○江口パネリスト

文化という視点で言えば、やはり都からの最先端の情報やモノを国司が国府に伝えて、それを国司が武蔵国中に府中の国府から発信していくと思います。そういう意味では、府中が武蔵国の首都的機能を持った古代の地方都市であり、神谷先生がおっしゃっている水都府中というのも、私は当たっていると思います。

モノがどう伝わってくるかということは非常に興味がありますが、今日のお話の水運という意味では、考古学的には非常に弱い部分でございます。実際、古代に国府が置かれた時代に、どこまで川を遡ってこられたのかということが重要で、「万葉集」の世界で言うと、埼玉県の津の歌が「万葉集」にあって、埼玉の津で舟が揺れているという歌ですが、その埼玉の津がどこかというのも各種説があります。行田市周辺の荒川水系だと言われていますが、そこを遡ってくるのが曳き船だと考えられています。

ただ、大河川多摩川はそういうことはあり得ないと思いますので、実際、どこまで大河川多摩川を遡ってくるのか、私は中世の段階では、常滑焼が出土する室町時代、品川湊を起点として多摩川を遡ってくるかと考えていますが、古代は難しいと思っています。実際、河川工学的には大河川多摩川をどこまで遡れるのか、埼玉の津みたいな曳き船であれば可能でしょうが、それはあり得ないと思いますので、その点、ご意見伺えるとありがたいと思いました。

○知花コメントーター

難しい質問であり考えたこともないですが、ただ多摩川の流域というものは変わってないと思います。雨の降り方も、最近気候変動で変わってきていますが、今対象にしているような時間スケールで言うと

第3回多摩川流域歴史シンポジウム 「多摩川史のまとめ」開催報告

2021年9月26日(日) 13:30~16:50

場 所：日野市東部会館内ホール

参加者：57名(WEB) 主催：多摩川流域懇談会

あまり激しい変化ではありません。そうすると、雨の降り方と流域の形が決まれば、都市化はしていないでしょうから、山がはげ山だったか森林だったかという差はあるにしても、大体の流量規模は決まってくるはずです。玉川上水から水を取ったという話もありますが、それがなかったとして、どれぐらいかという計算はできるはずです。そうすると、流速や水深がどれぐらいあったかという見積りはできるはずです。

そうした中で、どれぐらいの規模の船を、引っ張るのにどれぐらいの人数が要るかとか、風で動くかとか、その議論は物理的にやろうと思えばできると思います。大正時代などのまだ渡し船が残っていたときの状況から見ると、小さな船であればかなり浅いところでも行けます。それが、ただ物資を積む大きな舟となると話が違ってくるので、どれぐらいの水深が必要かについて、魚が遡上するのにどれぐらいの流量が必要かを見積もると同様の方法を用いるのが良いかもしれません。魚の場合どうやるかという、早瀬や一番水深が浅いボトルネックとなる場所を探し、例えばサケが遡上するのだったらこれぐらいの水深が必要で、マスだったらこれぐらい、ウナギだったらこれぐらいという必要な水深の基準を決め、その水深になるにはどれぐらいの水量が必要かというのを逆算します。同様に、まずは、舟が通る上でのボトルネックがどこで、そこでは普段の流量でどれぐらいの水深・流速になるのかという見積りをすれば、船はここまでというような議論もできるかと思えます。

定性的には、関戸か是政のところでは川の地形が大きく変わるので、あそこまではよくても、そこから上になると話は違うということまでは言えるかもしれません。しかし、そこまでもたどり着いたかどうかは、そういう細かい定量的な議論があってもいいのかという気はしました。

○神谷コーディネーター

ありがとうございます。

そうこうしているうちに予定の時間が近づいてしまいましたので、トータルコーディネートしていただいた小野さんに、このシリーズも一区切りということで、御感想をお願いします。

○小野パネリスト

今日、大栗川の話が随分出てきましたが、昔、大栗川にはいい石がいっぱいあって、庭石に適しているとみんな持って帰りなくなってしまった、という話を府中在住の古老の方から聞いたことがあります。川も、現状をもって昔のことを安易に考えてはいけないということなのかと思いました。

文化の面で言えば、玉川上水で当時の江戸幕府の国策のような感じで江戸の飲料水と新田開発のために水が持っていかれて、ただでさえ少ない多摩川の水がまた減ったという興味深い話がありましたが、それも逆に言えば、江戸以前はもう少し水運があってもいいと思いました。ただ、元から水が少なくて遡れないという話も今聞きまして、そうした中でどういった水運が考えられるのかと思ったところ、興味深い話が浅草の浅草寺縁起にありました。浅草寺再建のときに青梅から木を切り出してくるのですが、普段は水が少ないので、大水のときを見計らって、一気に多摩川に流して東京湾まで持っていき、東京湾に出してしまえば今度は高潮がくるので、一気に浅草までいけます。観音様のおかげでそれができたというような縁起の記述になっているのです。そうすると、中世以前には少ない水量でしたが、台風が来る前に木を切り出しておこうということで、それを見計らって一気に流すという流通の仕方もあったのかもしれないと思いました。

そんなことで、ある時期に入間川は筏の水運、多摩川はインフラ整備のために用水を流してしまうという、そういった江戸を取り巻く川の利用選択みたいなのも政策としてあったのだろうと思いましたので、近世以後と以前でそういった川の文化的機能に

第3回多摩川流域歴史シンポジウム 「多摩川史のまとめ」開催報告

2021年9月26日(日) 13:30~16:50

場 所：日野市東部会館内ホール

参加者：57名(WEB) 主催：多摩川流域懇談会

についても今後考えてみたいと思いました。

総じて、多摩川流域は開発の歴史であったと思います。それとともに災害との闘いもあったのでしようけど、そういった流れの中で流域景観は大きく変貌してきたわけですが、逆に、その中でいにしえの多摩川の風景というのが求められてきたと思います。特に江戸は新興都市ですので、その歴史に裏打ちされるような昔の歴史名勝は必要だったのでしょう。万葉の昔から和歌に詠まれて、長い文化的な歴史があるということで開発された多摩川ですが、いにしえの歴史名勝が文化の問題として多摩川に求められたというような大きな流れを感じ取ることができたと思います。皆様、先生方のお話を聞いてそういった感想を持ちました。どうもありがとうございました。

○神谷コーディネーター

ありがとうございます。

予定の時間になりましたので、パネルディスカッションを終えたいと思います。皆様、どうもお疲れさまでした。ありがとうございます。

閉会挨拶

竹田 正彦氏(国土交通省
京浜河川事務所長)



○竹田

ただいま御紹介いただきました国土交通省京浜河川事務所事務所長の竹田です。閉会の御挨拶を申し上げます。

本日は、第3回多摩川流域歴史シンポジウムに御参加いただきまして、誠にありがとうございます。コロナの関係でオンラインでの開催となりましたが、57名の方に参加していただいているということで、大変ありがとうございます。ただ、先ほど事務局からも御説明ありましたとおり、オンラインでの開催ということで、便利な面もありますが不具合も生じ

ることがあるということで御不便をおかけしておりますが、御参加いただきまして誠にありがとうございます。

また、本日、講演、パネルディスカッションということで、東京大学の知花先生、神谷委員長、ほか登壇いただきました皆様には、長時間にわたりまして貴重なお話を聞かせていただき、誠にありがとうございます。

この内容については冊子「多摩川の歴史巡り」でまとめられているということで、幅広いお話を聞かせていただき、このパンフレットを見るのに参考になったかと思います。

まだまだコロナの心配は尽きないところですが、ワクチンの接種、新たな取組が進みまして、もう少し落ち着けば、こういったパンフレットを持ってぜひ多摩川に出ていきまして、さらに多摩川について知り、多摩川らしさについてもっと探求できればと思います。

では、最後に、御参加いただきました皆様、御登壇いただきました先生方の皆様にお礼申し上げます。簡単ではございますけれども閉会の御挨拶とさせていただきます。本日はどうもありがとうございました。

『多摩川流域歴史セミナー』

「多摩川流域歴史セミナー」は多摩川と人間の関わりの歴史を掘り起こし、「多摩川らしさ」としての地域文化を再発見することを目的として、先史・古代、中世、近世、近現代と年代を追いながら、多摩川流域の博物館、歴史館を会場として、地域に即したテーマで随時公開セミナーを開催してきました。

第3回多摩川流域歴史シンポジウム『多摩川史のまとめ』開催報告

作成 多摩川流域懇談会

- 多摩川流域懇談会は、多摩川にまつわる歴史文化を総合的に研究し、その成果をわかりやすく多摩川で活動する人が利用し、多摩川をより深く知ることができるよう、取組みの幅を広げ、活動を行っています。
- 多摩川流域歴史セミナーに関する情報は京浜河川事務所ホームページをご参照ください。

URL: http://www.ktr.mlit.go.jp/keihin/keihin_index116.html

